TSしたい親友と止めたい俺の攻防戦

pantra

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然性転換したいと言い出した親友と主人公のお話。主人公は女の子が好きな普通の高校生。親友は主人公が好きな普通の高校生。異世界文明と接触して魔法などの不思議な技術がある世界での日常のお話です。

このお話はカクヨムにも投稿しています。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 24
第3話 …… 34
第4話 …… 45
第5話 …… 60
第6話 …… 69
第7話 …… 81
第8話 …… 98
第9話 …… 107
第10話 …… 122
オールユーニードイズ …… 134

第1話

「性転換したいんだ」

健全な高校生らしく、昼休憩に校舎屋上で親友と二人弁当を食べている最中の出来事だった。

親友の唐突な宣言を聞いたにもかかわらず、口の中のタコさんウインナーを吐き出さなかった俺は偉いと思う。

よく噛んで飲み下し、親友と目を合わせる。

「考え直せ」

他にどんな言葉があるというのだろうか。

俺の意見は真っ当なものだったと思う。

親友は困ったように曖昧な笑みを浮かべていたが、困っているのはこちらの方である。

一応説明が必要だろう。

２０ＸＸ年、人類はいわゆる異世界文明と初遭遇した。

様々な未知の技術や文化、概念が俺たちの世界に流入してきたのだが、その中に魔法と呼ばれるものがあった。
そう、魔法だ。
かつて俺たちの世界では空想の産物であったもの。
それが今では現実のものとして運用されている。
さらにはその中に『性転換魔法』と呼ばれるものがあるのだ。
何でそんなピンポイントな魔法があるんだよ、と突っ込みたくなるが、あるのだからしょうがない。
実際、性転換魔法の存在は多くの人々を熱狂させた。
ある者にとってそれは福音となり、また別のある者にとっては格好の娯楽となった。
悪魔の所業として忌み嫌う人々もいるが、まあそれは措いておこう。
肉体を造り替え、性別を転換する法。
これまで人類が保持していた外科的な転換手術とは一線を画する、完全なる生まれ変わり。
いかなる理論でもってそんな芸当が可能なのか分からないが、とにかく性転換魔法は実在する。
そして、よりによって目に前にいる俺の親友がそれを受けたいという。

何でやねん。
いやもう本当に何でやねん。
これまでそんなそぶりを見せたことはなかったと思うのだが。
「ふふっ、反対されるかもとは思っていたけど、実際面と向かって言われるとショックだね」
「ふふっ、じゃねーよ。ショックなのはこっちなんだが？」
「僕が女の子になりたいというのがそんなにおかしい？」
「おかしいに決まってんだろ……と言いたいところだが、色んな事情で性別を換えたいと思う人がたくさんいるのは事実だからな。一応理由を聞いてやる」
別に上から目線で理解ある友人を気取っているわけではない。
一杯いっぱいでこれしか言葉が出てこなかっただけである。
が、これに対して親友はなぜか顔を赤らめた。
だから何でやねん。
今のやり取りのどこに赤面する要素があるんだよ。
耳まで真っ赤にする必要ある？
ちなみに目の前にいる親友はかなりの美少年だ。
身長は１６２ｃｍと小柄だがすらっとしていて、少女漫画からそのまま出てきたよう

な印象がある。髪の毛などあり得ないほどさらさらで、知り合ってこの方親友の髪から天使の輪が消えたのを見たことがない。

なお2．5次元とか男の娘とかいうあだ名で呼ぶとキレる。

以前からかおうとしてそう呼んだ馬鹿が親友をブチギレさせ、その結果ボコボコにされた。主に俺に。

そんな親友に対する女子からの評価はおおむね『可愛すぎる、たまらん』というものと『自分より美人な男と付き合うとか無理』というものに二分されている。前者はともかく後者はなぜ付き合う前提になっているのか謎だが、まあ妄想を抱くのは自由だ。

ちなみに男子にもうっかり惚れる奴がいるし、中学生当時、教師から進路相談で男子校へ行くのを止められたという逸話もある。男の園にこんな危険物を送り込むわけにはいかんという判断だったのだろう。

ご近所では昔から可愛がられ、奥様方から勝手に実の息子のように扱われるそうだ。幼少時から顔を合わせれば抱っこされたりハグされたりしていたせいで、我が親友はご近所の奥様方のおっぱいの感触をほぼコンプリートしている。

何なら昨日も学校帰りに顔見知りの奥様にハグされて頭をなでなでされたらしい。はっきり言って高校生になった現在ではこれは事案だと思う。俺にはそんな経験ないのに。ないのに。

ともあれ、以上のように俺の親友は万人が認める美少年なのである。
そんな彼が俯き加減になって羞恥に耳まで赤く染めている。
少し離れた場所から抑えようとして抑えきれない黄色い悲鳴が上がった。俺たちと同じように屋上で昼食を摂っていた女子のグループだ。あれはどうやら『たまらん』派のようだな。というかクラスメートだ。
どうでもいい話だが『たまらん』派の中でもさらに過激な集団が、俺と親友がぐちょぐちょに絡み合う世にもおぞましい書物を製造して回覧しているらしい。
本当にやめて頂きたい。これまで熱さましの座薬しか入れたことのない俺の肛門に親友のご立派なものをねじ込もうとするな。その逆も同じだ。
ついでに腹がよじれるようなセリフを俺たちに言わせるのもやめろ。「愛してる」は百歩譲ってまだ許すが、「濡れてるぜ」は正直ないし、俺たちは天地が引っ繰り返っても「妊娠しちゃうぅっ」とか言わないぞ。
どうでもいい話はここまでにするとして。
外野から聞こえてくる嬌声をよそに、俺は我が母ちゃん入魂の卵焼きを頬張った。
うむ、今日もしみじみ美味い。
もぐもぐやっている俺の顔をなぜか親友がじっと見つめてくる。
性転換したい理由については一向に話そうとはしない。が、言いにくい理由なのだろ

う。デリケートな問題だしな。性転換魔法が出回ってからはわりとカジュアルに性別を換える人もいるが、普通の人間にとっては一大決心が必要だろうし。

俺は弁当箱に残った卵焼きの片割れを箸でつまむと、親友に差し出してやった。

「ほら、やるよ。お前も好きだっただろ」

我が母ちゃんの卵焼きは天下取れるレベルだからな。親友ももちろん大好物だ。

俺としては少しでも気分を解してやろうという思いがあった。

純粋な善意だったんだ。

俺は顔の高さに持ち上げていた卵焼きを親友の弁当の上に置こうとした。

だけど、ここで親友が思いも寄らない行動に出た。

いまだに赤いままの顔を近づけたかと思うと、下から受け止めるようにして卵焼きを口に咥えたのだ。

またしても外野から「きゃー」とか「ぎょえー」とかいう悲鳴が聞こえてきたが、ここは無視しよう。

こぼれないよう口元を手で押さえながら咀嚼する親友に、俺は呆れ声で言った。

「何で直接食うんだよ。置こうとしたのに」

「ご、ごめん。何かつい」

つい、でナチュラルにあーんしてしまうところに親友のこれまでの人生の軌跡が窺え

る。

幼少期から現在に至るまで散々にあーんされてきて、もはや習性として身についているのだろう。ひな鳥かよ。

それにしても口元を押さえてもぐもぐやっている我が親友、顔は真っ赤だしよく見ると目も潤んでいるし、もしや熱があるのでは？

先ほどからのおかしな言動は熱に浮かされてのものなのだろうか。

心配だから弁当を食い終わったら保健室へ連行しよう。

「交換にぼくも何かあげるよ。何がいい？」

相変わらず理由については語らず、親友は俺によく見えるように弁当を持ち上げる。

「じゃ、これな」

俺が指差したのは親友のママン謹製のポテサラだ。アスパラの肉巻きにも心が惹かれたが、肉には肉を。おかず取引は等価交換が大原則。

ママン謹製ポテサラを箸で持ち上げた親友は、なぜか神妙な顔で口元を引き結んで小さく頷いてから、俺に直接食べさせようと箸を近づけてきた。

「はい、あ、あーん」

「いや、何でだよ。普通に弁当に置いてくれよ」

「えっと、つい……」

震える声で親友が言い訳する。
ついじゃないだろ。明らかに何か決意を固める仕草をしてたじゃねーか。
俺は親友の行動にかなり困惑していたが、いまだに箸を下げようとせずポテサラを差し出したまま固まっているのが気の毒になり、仕方がなくそのまま食ってやることにした。
うむ、美味い。親友のママンはポテサラで天下取れるな。
それにしても外野がうるさいな。
もはや隠す気もない大きな悲鳴と繰り返し名前を呼んで安否を確認する声……ん？
明らかに異変が起きていることに気付き、俺は同じクラスの『たまらん』派と思しき女子グループの方へ視線を向けた。
するとそこには一人の女子がぐったりと横たわっており、その周りで友人たちがおろおろと呼びかけている光景があった。
「どうしたんだろう？」
「ああ。貧血でも起こしたか？」
親友の心配げな声に俺も応じる。
様子を見に行きたいのか、そわそわと落ち着かない様子の親友。相変わらず優しい奴だ。

「ちょっと声かけてくるか」
「うん」
弁当をその場に置き、俺たちは騒然としている女子グループに近づいて声をかけた。
「おーい、何があった。大丈夫か？」
倒れた友人を取り囲んでいた女子たちはいっせいにこちらを振り向き、そしてなぜか悲鳴を上げた。
「ひええっ」
「……クラスメートからこんな反応されるほど俺って嫌われてるのか？」
さしもの俺も凹みそうになったが、隣に並んだ親友がぽんと背中を叩いて言った。
「心配しなくてもそんなことないよ」
親友へ顔を向けると、柔らかい微笑を向けてくれる。うーむ、美少年。
俺たちがそんなやり取りをしていると、魂が抜けるような変な声を漏らしながら二人目の女子が崩れ落ちた。
「お、おい、どうした？　何でこいつまで倒れたんだ？」
俺も親友も慌てて倒れた女子の元へ駆け寄る。
彼女はほとんど意識を失っているようで、かすかにうわ言というかうめき声のようなものを発していた。

え、怖い。一体この空間に何があるんだ。
あ、いかん。スカートがまくれ上がってパンツが丸見えになっているじゃないですか。
吸い寄せられる視線を必死に引きはがそうと戦っていると、脇腹に鋭い痛みを受けた。
「うごっ」
「こんな時にどこを見てるんだよ」
「ちゃうねん」
我が親友はかなりの紳士であるため、俺が女子をスケベな視線で見ていると決まって凍り付くような眼差しを向けてくる。ごく平均的な男子高校生らしくエロ大好きな俺としてはつらいところだ。
でも俺は知っている。表では紳士な態度を崩そうとしない親友が、実はエロいことに興味津々だということを。
あれは忘れもしない中2の夏、とあるルートから手に入れたスケベ動画を二人で鑑賞し、一緒に性の扉を開いた仲じゃないか。それ以来、親友がその手のデータをこっそり収集しているのを俺は知っているんだぞ。
まあ、それはいいとして。

とりあえず俺は弁解することにした。親友の視線もそうだが、それ以上に女子たちから向けられる視線にいたたまれなくなったからだ。

「これは不可抗力なんです」

「ばか」

どうもすみませんと女子たちに頭を下げる俺と、そんな俺に罵倒の言葉を投げつける親友。

すでに倒れた女子のスカートは整えられいる。

女子たちは一連のやり取りに毒気を抜かれたのか、スケベな俺を許してくれた。ただし額を押さえて天を仰いでいたり胸を押さえて身を震わせたりしていたから、内心ではかなり呆れたり憤ったりしているみたいだ。

女子グループに声をかけて早々に脇道にそれてしまったが、俺たちは本来の目的を果たすことにした。

倒れてしまった二人の女子には特に持病の類はないらしい。

熱中症になるほど今日は気温も高くないし陽射しもきつくない。食中毒なら吐いたりするだろう。

二人目の女子が倒れた様子は、恐ろしいものを見て気絶してしまうホラー映画の登場人物をどこか彷彿させるものがあったのだが、もしやこの屋上には『出る』のだろうか。

倒れた二人とも『見える』体質とか？
「な、なあ。この二人ってもしかして霊感があったりしないか？」
俺の質問に対し、女子たちは揃って不思議そうな表情を浮かべた。
どうやら倒れた二人にだけ見える幽霊がこの場にいるわけではなさそうだ。
実は幽霊が大の苦手の俺がこっそり胸を撫でおろしていると、なぜか隣の親友がくすくす笑った。
ちなみに我が親友は幽霊の類をまったく信じておらず、オカルト話は鼻で笑い飛ばすタイプだ。
そして、幽霊を怖がる俺を時々からかってくる。
恥ずかしさを誤魔化すために咳払いする俺と、そんな俺をからかい交じりに笑う親友。
どこかで「ヒュッ」と息を吸い込むような音がした。
……何だ？
俺が詮索するような視線を女子たちへ向けると、彼女たちは一斉に目を逸らしたり毛先を指にくるくる巻き付けたりした。
ともあれ、二人が急に倒れた理由については皆よく分からないようだった。
女子の一人が呟いた「寝不足だったのかも」という言葉に皆が追従していたが、実際

そうなのかは分からない。逆に「興奮しすぎたせい」と漏らした別の女子は、一斉に飛び掛かられて口を塞がれていた。

女子ってちょっと意味が分からなくて怖いところがあるよな。

二人が目を覚ます様子もないし、このまま放っておくのも気が引けるので保健室へ連れていくことにした。

怪我をしているわけではないし、倒れた際に頭を打ったりもしてないので別に構わないだろう。

さて、そこで問題になったのが意識のない二人を運ぶ方法だが。

いろいろ意見は出たのだが、結局俺と親友が一人ずつおんぶして運ぶことになった。

屋上から保健室までは階段もあるし、おんぶするのが一番安定するからだ。

倒れた二人のうち、一人は身長１４０ｃｍ台と小柄で、もう一人は１７０ｃｍ近くあるクラスで一番背が高い女子だった。俺と親友のどちらがどちらを受け持つかは自明の理というものだろう。

女子たちの手を借りながら意識のない体を背負い、ゆっくりと立ち上がる。

むう、これは……。

正直、俺は真顔を保つのに必死だった。

俺が背負っているクラスで一番背が高い女子だが、彼女は身長同様に他の部分もよく

発育していた。具体的に言えばおっぱいが大きい。当人の意識がないので完全に体重を預ける形になっていて、俺の背中はいまだかつてない感触にさらされていた。

これが、これこそが我が親友が幼少期から味わっている境地なのかよ。

すげえ。

ちなみに彼女はバレー部所属で鍛えているせいか、ふとももがかなりむっちりしており、にもかかわらず信じられないほど柔らかかった。おんぶという体勢をする以上相手の脚に腕を回さないといけないのだが、俺なんかが触れて申し訳なくなるくらいに柔らかくてスベスベしているのだ。

これはいかん。

ちょっと勃起しそうだ。いや、白状するとすでに甘勃ちしている。

できれば中腰になって落ち着くまで待ちに入りたいが、小柄な方の女子を背負った我が親友はすでにすたすた先へ進み始めてしまっているし、いつまでも動かずにいると俺を補助するためについている女子たちに疑念を抱かれてしまう。

覚悟を決めた俺は親友の後に続いて歩き始めた。

多少へこへこした動きになっているかもしれないが、補助をしてくれている女子にはたぶん気付かれないだろう。気付かれないといいな。気付かれないでいてくれよ。

いざとなったら「重い」という禁句を使ってへこへこ歩きの言い訳をする手もあるが、

意識を失っている女子の名誉のためにもできればその手は使いたくない。かといって勃起がバレるのも嫌だ。

俺はかってない集中力で歩みを進めつつ、密着するおっぱいやふとももの感触を真顔で堪能することに腐心した。

ところで、おんぶしている女子が時々うわごとのように「だめ、二人の間にあたしなんかが挟まるなんて」とかどうとか言っているのが耳元で聞こえてくるんだが、どういう意味なんだろう？

何となくいかがわしい内容のようにも聞こえて、おんぶしている女子がクラスでもかなり真面目な優等生であることを知っている俺としては、真偽はどうあれ不覚にも興奮してしまう。

やっぱりこの年代は男子も女子も大概同じようなことを考えているんだな。俺だけが特別スケベなわけじゃなくてちょっと安心した。

首筋や耳の裏にかかる熱い吐息と共に妙に意味深なうわ言を聞きながら、俺はへこへこ保健室を目指す。

何となく補助してくれている女子たちの視線が冷たいような気もするのだが、何かの気のせいだろう。

親友から遅れること数分。

保健室に辿り着いた俺たちを待っていたのは、心配そうな女子たちの視線と我が親友の絶対零度の眼差しであった。
「ずいぶん遅かったね」
「まあな」
まあな、じゃないが、俺は他に言葉が思い浮かばなかった。
やばい、完全に勃起していたのがバレているぞ。今ちらっと俺のちんちん見たし。
というかどうして我が親友は平気なんだよ。小柄な女子だって胸がないわけじゃないし、絶対に柔らかくていい匂いがしたはずなのに。
紳士だから？　妹で慣れているおかげ？　それとも近所の奥様方に比べるとお子様すぎるせい？
どちらにしても紳士ってすげえ。
俺なんか完全におんぶしている女子に恋しそうになってるもん。
得体の知れないうわ言とかがちょっと怖いから踏みとどまってるけど。
「保健室の先生は今不在みたいだから、とりあえず空いてるベッドに寝かせてあげて」
「分かってゃ」
噛んだ。
数人の女子が耐え切れないように吹き出し、俺は耳まで熱くなるのを意識しながら慎

重に背中の女子をベッドに降ろした。
すぐに他の女子たちが介助してベッドに寝かせ、胸元までシーツを被せた。
彼女ももう一人の女子もまだはっきり意識は戻らないようだが、見たところ苦しそうな表情はしていない。
「あたし、保健の先生呼んでくるね」
「うん。お願い」
親友が微笑みながら応じると、相手は顔を真っ赤に染めながらバタバタと保健室を飛び出していった。
美少年やべえな。たった一言で女子にあんな反応をさせるとか。俺なんか完全にただのスケベ野郎としか思われてないのに。ここまでおんぶの補助をしてくれていた女子たちが今も俺の股間へちらちらと視線を向けている。
女子は視線に敏感という話を聞くけど、ちょうどこんな感じなのだろうか。視線の意味が欲望か軽蔑かの違いはあるだろうけど、すごく居心地が悪い。
いたたまれなくなった俺は女子たちの視線からさりげない角度で股間をガードしながら、ここまで持ってきてもらっていた俺と親友の弁当箱を受け取る。
「ありがとうな」
「ひえっ、こ、こちらこそ」

駄目だ、完全に怯えられている。
思わず込み上げてきそうになった涙をこらえ、親友の方へ向き直った。
「じゃあ、俺たちは行くか」
「うん」
親友の相槌に俺は心が浄化されるのを感じた。
エロいことを考えていると冷たい眼差しを向けてくることはあったりするが、やはり俺にとっては無二の存在なのだ。
たとえどんなことがあっても俺たちの間にある絆だけは断ち切られないという絶対的な信頼。
何十年後かも俺はこの男のことを親友と呼んでいるんだろうな。
……あ、そういえば男じゃなくて女に換わっている可能性もあるんだったか。
結局性転換したい理由を聞きそびれてしまったが、それはまた今度でいいだろう。
親友も話しにくそうだったし。
どちらにしても弁当の残りをどこかで食べないとな。
屋上まで戻るのも面倒だし、教室でいいか。
俺は親友と連れ立って保健室を出て行こうとし、不意に思い出した。
「あっ」

「わっ」
後ろをついて来ていた親友が、俺が急に立ち止まったせいで背中にぶつかって来た。
振り返ると鼻をぶつけたのか手でさすっている。
「何で急に止まるの」
「すまん。痛かったか」
上目づかいで睨む親友と謝る俺。
どこからか「ツフゥー」というため息ともつかないようなものが聞こえてくる。
俺が視線を向けると、ベッドの周りに集まった女子たちが「何でもないから気にするな」という風に首を横に振った。
……何だ？
女子の中で一人だけ俺たちにサムズアップしている奴がいるんだが。
よく分からんが俺もサムズアップし返すと、周りの女子がそのサムズアップ女子をばたばたとベッドに押し倒して俺たちから隠した。どうでもいいけど、女子たちが積み重なったベッドには意識をなくした子が寝ているはずなんだが、大丈夫なのか？
やっぱり女子はよく分からん。
まあ、女子たちの謎の奇行はいいとして。
俺には思い出したことが一つあったのだ。

屋上で弁当を食べている時、親友の様子がおかしくて熱があるのではないかと疑ったのである。

今見たところ、顔色が特に赤いということはなさそうなのだが、せっかく保健室に来たのだから念のために熱を測った方がいいだろう。

戸棚をごそごそ探し回って、額にかざして計測できるタイプの体温計を見つけた俺は、親友にそれを見せながら言った。

「でこを出せ」

「え、何で？」

訝しげにする親友。どうやら自覚はないようだ。

「屋上にいる時、やけに顔が赤かったからな。熱があるかもしれないから測っておいた方がいいだろ」

「ないよ、熱なんて」

「分からないだろ。ほら早く出せよ」

「もう……」

俺の言葉に反論しつつ、仕方なさそうな様子で親友はあり得ないほどさらさらな前髪を手で持ち上げ、額を露出させた。

「ん」

計測されるのを待つ親友を前にして、俺は少し戸惑ってしまった。
……目まで閉じる必要ってある？
身長差の関係でこちらを見上げる形になるせいか、心持ち口元を差し出しているような姿にも見える。
これっていわゆるキス待ち顔という奴では？
美少年というのは本当に恐ろしいな。何をやっても絵になり過ぎてどういう解釈をしていいかわけが分からなくなる。
ただこうしてみるとまだ少し顔が赤いな。やっぱり熱があると見た。
外野？　さっきから騒いではいるが今さら動じないよ。無視だ。
「うりゃ」
掛け声とともに体温計を親友のでこにかざすと、ピッという電子音と共に体温が表示される。
俺が表示を確かめていると、親友もこちらに回り込んで覗き込んできたので、見やすいように少し手の高さを下げてやる。女子がまた何か奇声を発した気がしたが、そろそろ何も感じなくなってきた。
「３６．８度」
俺たちは声を揃えて体温表示を読み上げた。

……微妙。

高めではあるが、熱があるというほどではない。

「お子様体温か」

閃いた俺は指パッチンして音を鳴らそうとしたが、皮膚が擦れる音しかしなかった。

そんな俺の足を親友がぎゅっと優しく踏みつける。

「ぼくは子どもじゃない。ただ平熱が高めなだけだよ」

「なるほど湯たんぽ」

「違う」

もしやご近所の奥様方はこの温もりを求めている……？

長年の謎についに光が差し込んだような気がして、俺は「エウレカ！」と叫びながらふざけて親友へ抱き着いた。

「ふわっ、わああっ」

俺の胸元で親友が何かわめいているが、そんなことよりこの温もりはどうだ。

いや、マジであったかいな。想像以上にぽかぽかだ。

「ちょ、ちょっと離してよ」

「わはは、逃がさん。お前は一生俺の湯たんぽだ」

ふざけてじゃれ合う俺と親友。

うむ。性転換の悩みとか色々あるのだろうが、俺たちはこれでいいのだ。

たとえどんなことがあったとしても、俺たちの間には変わることのないものがある。

ちなみに保健室を満たす女子たちの悲鳴は、少し前に出て行った女子と共に保健の先生が現れるまで途切れることがなかった。

そして保健室でバカ騒ぎをするんじゃありませんとの叱責を受けることになった。

解せぬ。

第2話

夕飯後、リビングのソファにだらしなく座りながら何となくテレビを見る。

映し出されているのは今人気絶頂の若手女優が主演している連続ドラマだ。そして主演女優の親友役であり、彼女の相手役に横恋慕する役柄を演じている、もう一人の女優。

主演女優に引けを取らない美貌と抜群のスタイルを誇るこの女優が元は男だなんて、とてもではないが外見を見ただけでは信じられない。

イケメンと元イケメンが唇をくっ付け合ってレロレロしている様子を苦々しく眺めていた俺は、元イケメン現美人女優のブラウスの前が開かれて胸の谷間が露わになったところでチャンネルを変えた。

変えた先の番組は、どうやら報道番組のようなワイドショーのような何かだった。こういうのが好きな我が母ちゃんなら詳しいだろうが、あいにく俺は興味がない。

画面上で一人のおっさんが大写しになる。脂ぎっていてデブで不細工なおっさんで、それなりに名の通った評論家だか大学教授だかの肩書の持ち主だ。

学があるというわりに口汚く、唾を飛ばして持論を展開しているこのおっさんも元は女だそうだ。昔から女性の社会進出に関する熱心な論客として有名だったらしいが、俺たちの世界に性転換魔法がもたらされたばかりの頃、その賛否が盛んに議論されている最中にいつの間にやら性転換していたらしい。

結局、女として地位を得たいんじゃなくて、地位のある男になりたかったんだねぇ、とは我が母ちゃんの弁である。

ちなみに性転換して以降、夜遊びがすごいらしい。時々母ちゃんは俺にはよく分からないところから情報を持ってくる。

俺はため息を吐き出してテレビを消した。

今の世の中、性転換を経験している人間は探せばそれなりに出てくる。

有名人は話題性ゆえに認知されやすいけど、一般人でも意外と身近なところにいるものだし、そういった決断をした人々に対して差別的な言動を取ることはタブーとなっている。

立ち上がってリビングから出て行こうとする俺に母ちゃんが声をかけてきた。

「もうテレビ見ないの？」

「見ない。部屋で勉強する」

「あら珍しい。後でコーヒー持って行ってあげようか」

「後でな」
ひらひらと手で応じて、俺は自分の部屋に戻った。

性転換魔法とは何ぞや。
それは完全なる生まれ変わりである。
我が親友の衝撃の告白を受けたその日、帰宅した俺はネット上で検索した。
そして出てきた解説サイトに書いてあった一文がこれだ。
完全なる生まれ変わり。
男は女に、女は男に。
肉体はあらかじめそうであったのと同義に一切の瑕疵なく再構成される。ここでいう瑕疵がないというのは、主に性差が見られる器官の充足、そして生殖能力を十全に発揮できることを意味している。
被施術者が元来有していた先天的ないし後天的異常や疾患を取り除けるわけではないが、少なくとも外科的に外観を整える手術とは、この点において根本的に隔絶している。
どのようにしてそれを実現しているか、という解説部分は正直俺には理解不能だった。何しろ専門用語のオンパレードな上、半分以上が地球言語で発音不能な異世界言語

が表記されているのだ。

とにかく何だかよく分からんやり方で体を造り替え、ついでに元の精神と新しい肉体が齟齬を起こして変調を来さないようパスを繋ぎ直すのだそうだ。

それによって精神の方も新しい肉体にしっかりと適合するようになる。

この点からも軽い気持ちでカジュアルに性転換しようとする人たちには注意喚起が為されている。違う性別をちょこっと体験してみたい、なんて軽率に性転換したら最後、精神的にもきちんと性転換してしまうからだ。

二度目以降の性転換は不可能ではないが、繰り返す度にリスクは高まるため、特別な理由が認められない限りは施術が受けられるのは二回までとされ、間隔も五年以上開けることが義務付けられている。

ちなみに心身の不調が主なリスクだが、かつて異世界でこの魔法が開発されたばかりの頃は同一人に無制限に魔法を施した結果、原形質のスープのように被施術者の肉体が崩壊してしまったそうだ。

今ではそんな危険はほぼ１００％あり得ないと解説サイトにも書いてあったが、『ほぼ』というところがミソだ。

実際、どこぞの独裁国家が異世界人しか扱えない性転換魔法の秘密を得ようと実験を繰り返した結果、大量の人間を二目と見られない姿に変えてしまったという都市伝説が

あるらしい。
というように、調べれば調べるほど深い闇が垣間見えてくる性転換魔法だが。
一般的に言えばしっかり安全性は確保された魔法技術だし、それを必要とする人たちにとってはまさに神の祝福のようなものだ。
だから人類は異世界と接触して性転換魔法の存在を知った時、自分たちが変わることを選択した。すなわち、原則的には生まれ落ちたままの性別で生きざるを得ない世界から、人類が自らの意思で性別を選択できる世界へと変わることを。

正直なところ、俺にはどうして親友が性転換魔法を受けたがっているのか分からない。
まだ聞けていないが、それなりの理由はあるのだろうと思う。
よほどの馬鹿じゃない限り軽々しく性別を換えるなんてことできないし、結構な額の費用もかかると聞いた。
でもそれらを理解した上でなお、本音を言えば俺は親友に性転換して欲しくない。
純粋に戸惑っているというのもあるし、俺たちの関係性が変わってしまうかもしれないという恐怖もある。
親友がもし女になったら、これまでのように気安く接することは難しくなるだろう。

周りの目だってあるし、いずれお互い恋人ができたりすれば異性同士の友情を維持するのはますます厳しくなる。
結局のところ、俺は親友を失いたくないのだ。
たとえそれが親友自身の選択によるものなのだとしても。
やめてくれ。頼むから俺から大事なものを取り上げないでくれ。
最初に打ち明けられた時、声を大にしてそう訴えるべきだったのだろうか。
今からでもそう伝えたほうがいいのだろうか。
親友自身の意思を踏みにじり、傷つけることを分かった上で。
それでも俺はわがままを押し通すべきなのだろうか。

自室で一人思い悩んでいると、スマホからＲＩＮＥ着信を知らせる音が鳴った。
アプリを開くと、我が親友が一件のメッセージを送ってきていた。
【写真送るね】
簡潔な一言を俺が確認したのとほぼ同時に新たにメッセージ、というか画像が表示される。
それを見た俺は思わず目を見開いた。
なぜならそこには、地味なグレーの下着姿の我が親友にそっくりな女の子の姿があっ

たからだ。

「え？　何で？　ええ？」

ちなみにほんの数時間前、親友と俺は一緒に下校している。その時まで確かに親友は男だったし、本来性転換魔法の施術は効果が定着安定するのに最低三日間から一週間くらいかかると言われているので、この画像の女の子が親友であるはずがない。

だとするとこの女の子は誰なのか。何なのか。

顔は我が親友とよく似ており、相当な美少女だ。色気ゼロなグレーのスポブラに包まれた胸部は十代半ばの外見からすると十分に豊かな質量を誇っている。折れそうに細い腰や手足との対比がいっそアンバランスで、背徳的にすら感じられた。

画像を拡大しつつ隅々まで確認し終えた俺は一つの結論に至り、天井を仰いで手のひらで顔を覆った。

これ、我が親友の妹ちゃんじゃないか？

親友の妹ちゃんは現在中学三年生。身長は兄貴よりやや低く、顔もよく似ていて昔から頻繁に双子と間違われてきた。

下着姿を見たことがあるわけではないが、体型もこの画像とほぼほぼ同じ。小柄な兄貴と比べると発育している印象がある。

ちなみに妹ちゃんと俺との関係はあくまで親友を介したものに過ぎず、直接やり取り

するような親しい間柄じゃない。まあ、親友宅へ行ってこれまで散々一緒に遊んだことがあるから、そうそう知らない仲でもないんだが。

ピロン、と再びスマホがメッセージ着信を知らせる。

【流出させたら社会的にも物理的にもコロスから♡】

いかにも妹ちゃんが口にしそうな毒舌メッセージに、ますます俺の中で確信が深まる。

常に柔和で滅多なことでは口調が乱れない我が親友とは対照的に、妹ちゃんは結構な毒舌家だ。我が親友の親友たる俺に対しても昔から容赦がない。まあ、それはそれで可愛いものだが。

それにしてもなぜ妹ちゃんは俺のスマホに下着姿なんて送り付けてきたのだろうか。

もしや……俺が好きとか？

……いや。いやいやいや、それはないな。

またこれをネタに俺をからかうつもりなんだろう。

これまでの経験上間違いない。

我が親友のスマホを勝手に使ってまでやることではないと思うし、下着姿を送るなんて体を張りすぎだと思うが。

親友はこれに気付いているんだろうか。明日それとなく話して、親友から妹ちゃんに

注意してもらおう。送るならせめて服を着て欲しいと。
わたしの下着姿見て興奮したくせに。キモ。
とか言われそうだな。
髪の毛をぐしゃぐしゃとかき混ぜ、俺は天井を見上げていた視線を下へ降ろした。
我ながら節操がないと思うのだが、俺は今勃起していた。
昔からよく知るとはいえ、ご近所でも評判の美少女である妹ちゃんの下着姿をじっくり隅々まで見てしまったのだ。興奮するに決まっている。
よって我が相棒がやる気を出してしまうのも致し方なし。
「とはいえすごい罪悪感あるなこれ」
ちんちんはギンギンだが、すっきりさせてしまおうという気が微塵も起きない。
どの道母ちゃんがいつコーヒーを持って乱入してくるか分からない状況下でオナニーなんてできないのだが。
とりあえず部屋に転がっているクッションを膝の上に置いてやる気満々の我が相棒を隠すことにしよう。
妹ちゃんの画像も見られるとまずいので一度表示を消し、母ちゃんが近づいてくる気配がないのを確認して再度表示させた。
「うーん……、ヤッベーよなぁ」

何がヤバいのかと言えば、俺が性転換後の親友に異性としてムラムラしてしまう可能性がこの画像で証明されてしまったということだ。

実際、クラスの女子の脳を破壊するレベルの美少年である親友が女の子になったら、妹ちゃん以上の美少女になってしまうのでは？

これでおっぱいが大きかったりした日には終わりですよ、終わり。

「それでも……それでも俺たちの友情は誰にも奪えない。そうだよな？」

柔らかそうな妹ちゃんのおっぱいを拡大表示させつつ俺が芝居じみた呟きを口にしていると、ノックの音と同時に「入るわよー」と母ちゃんの声がして部屋の扉が開いた。

もちろん画像は光速で消したが、クッションを抱きしめている俺を面白そうに見ていた母ちゃんの様子から推察するに、勃起してたのバレてたわこれ。

このところ人前で勃起する機会が多すぎて性癖が壊れそう。

助けて、親友。

第3話

諸君、俺はおっぱいが好きだ。

知っているって？

ああ、構うものか。それでも俺は声を大にして宣言しよう（心の中で）。

諸君、俺はおっぱいが大好きだ。

さて、現在俺の目の前には一組のおっぱいがある。

より正確に表現するならば、一組のおっぱいの持ち主がいる。

場所は教室。俺は自分の席に座っており、前の席に問題のおっぱいの持ち主が座っている。

先日、昼休憩の時間に俺と親友が声を掛けたら失神した女子だ。

バレー部に所属しているこのバレー女子は、１７０ｃｍを越える長身に鍛え上げられたふとももと見事なおっぱいの所有者である。

そして諸君、俺はこのおっぱいの感触を知っている。

我が背中と魂とに甘美なる感触を記憶している。

何だろう、この優越感は。
まるで蒙を啓かれたような心持ちだ。
遥かなる双峰を越えた先には新たな地平が広がっていたということか。
ここがアヴァロンか。
とまあ、俺史上最高に気持ち悪いことを考えながら、俺はバレー女子との雑談を楽しんでいた。
以前は特に仲が良かったわけではない。
よく話すようになったきっかけは失神した彼女をおんぶして保健室へ運んだことだった。
後日、バレー女子はわざわざ俺にお礼を伝えてきてくれた。
その時の、頬を少し赤らめて恥じらう様子にまんまと胸を撃ち抜かれた俺は、恋というものを自覚した。
可愛い。
好き。
もっと話したい。
おっぱい。
それしか頭に浮かんでこない。

元からさほど褒められたものじゃない知能に深刻な障害が見受けられるが、多幸感に包まれた俺は気にしない。
恋は病というが、それよりも麻薬だなこれは。
ずぶずぶに浸っていたい。
そんな風に俺とバレー女子がキャッキャウフフしていると、まるでモーゼが海を割るようにクラスメイトたちに道を開けさせながら、我が親友が近づいてきた。
普通に歩いているだけなのに、なんか後光が差してるんだよな。圧に負けたようにクラスメイトたちが後ずさりするのが割と洒落になってない。美少年って怖い。
「楽しそうだね。何話してるの？」
我が親友がキラッキラの笑顔を浮かべて尋ねてくる。
ああ、心の底から楽しんでたよ。なのに何でお前は邪魔をするんだ。空気読めよ。
などとケツの穴の小さいことを俺は考えたりしない。
親友を歓迎するようにこちらも笑みを浮かべ、バレー女子と話していた他愛ない内容を説明しながら、ふと彼女の表情を窺った。
完全に蕩け切っていた。
とろっとろだった。
頬は上気し、口元はだらしなく緩み、潤んだ眼差しは我が親友の憎たらしいほど綺麗

な顔へまっすぐに向けられていた。
俗に言うメスの顔って奴だ。
これはひどい。
バレー女子の表情を見た俺は、失恋というものを自覚した。
まあ、初めての経験じゃないが。

昼休憩だ。
いつもの屋上、いつもの場所で俺と親友は隣り合って腰を下ろしていた。
うむ、今日も我が母ちゃんの弁当がうまい。
「あの写真、どうだった?」
「どうもこうも、お前妹にちゃんと注意しとけよ」
朝からあの下着写真の真相を聞こうとしてもはぐらかされ続けていたのだが、唐突に親友から感想を求められた。
だが、勃起したけど罪悪感で抜けませんでしたなどと説明できるわけがない。
俺は良識人ぶって苦言を呈した。
いや、本当に妹ちゃんに注意しろよ。そもそも兄貴の親友に下着姿を送りつける神経

が理解不能だし、何かの間違いでネットに流れたら永遠に消えないぞ。
「妹？」
首をこてっと傾げる親友。
なぜにそんな不思議そうな顔をしているのか。
「だからお前の妹の写真だろ。下着だけの格好をした」
「妹じゃないよ。あれ僕」
そう告白する親友のくちびるがやたらつやつやしているように見えるのは、俺の目がお腐りあそばしているせいか、それとも親友のママン謹製コロッケの油のせいだろうか。
そんな下らないことを脳裏に浮かべる一方で、肝心の親友の告白については脳が理解を拒絶していた。
「え？」
「え？」
お互いに疑問の声を上げて顔を見合わせる俺と親友。
何とも言えない沈黙が俺たちの間から零れ落ちて、お互いの脚でピンボールみたいに跳ね返ってどこかに飛んで行った。
「……よし、分かった。服脱げ」

ようやく先ほどの告白の意味を咀嚼して理解した俺は、あり得ない事実を確認するため親友に命令した。
「な、何でそうなるんだよ」
親友よ、なぜ両腕で胸を庇うんだ。
「お前が男だってことを確認するためだよ。いいから早く脱ぐんだ」
「そんなの服着てても見たら分かるだろ。僕は男だよ……まだ」
最後に付け加えられた不穏すぎる言葉から全力で耳を塞ぎつつ、弁当箱を置いた俺は両手を胸の前に掲げて言った。
「自分でシャツのボタンを外すか、それとも俺に外されたいのか」
たぶん、この時の俺はやり過ぎていたと思う。
でも極度の混乱で気が狂いそうだった俺には親友を気遣ってやる余裕はあまりなかった。
まだ男だというなら、なぜあの写真の女の子が親友だということになるのか。
どうしても目の前で親友が男だという証拠を確かめて安心したかったのだ。
「わ、分かったよ。自分で脱ぐから」
そう言って、親友は一番上から一つずつシャツのボタンを外し始めた。
俺が見守る中、すべてのボタンを外し終えた親友はシャツをはだけて、Tシャツに包

まれた扁平な胸板をこちらに向かって開陳してみせた。
「ほら、これでいいでしょ」
「……おっぱいがあるようには見えないな」
「ないよ」
「ふむ」
おもむろに両手を伸ばした俺は、親友の胸に思い切り手のひらを押し付けた。
伝わってくる感触は薄い筋肉とその下にある肋骨。早鐘を打つような鼓動。人のぬくもり。
俺は深く息を吸い込むと、安堵のため息を吐き出した。
間違いなくこれは男の体だ。
バレー女子のおっぱいの感触を知った俺には理解。
手元に落としていた視線を持ち上げると、そこには羞恥に震える美少年の顔がある。
同じ男に触られるのがそんなに恥ずかしいものか？
そんな疑問が頭をよぎるが、どこに羞恥を感じるかは人それぞれだ。
まあ、これまでも散々俺と親友は年頃の男子として、子犬がじゃれ合うような遠慮のない身体的接触を繰り返してきたし、今さら女子が胸を触られて恥ずかしい的なものではないと思うんだが。

ちなみに実をいうと俺は口の中を見られるのがなぜか無性に恥ずかしい。
口を開けて見せてと言われると、ついくちびるの隙間から歯だけ覗かせて誤魔化してしまうくらいだ。
自分でも理由はよく分からない。
俺の羞恥ポイントはどうでもいいとして、我が親友の話に戻ろう。
恥ずかしそうにしている親友の姿に遅ればせながら罪悪感を覚えた俺は、はだけられた彼のシャツを胸元で合わせながら、誤魔化すように口走った。
「お前、乳首がたっ」
最後まで言う前に返事が返って来た。
脳天へのチョップという物理的な形で。
「ぐおおおっ！」
あまりの痛みに俺は頭を抱えてうめいた。
我が親友め、思い切り殴りやがったな。
相手の様子を窺うと、同じようにチョップした手を押さえて痛がっている。
「痛ったぁ……」
何をやっているんだ、俺たちは。
親友が衣服を整え、平静を取り戻した俺たちは改めて弁当をつつきながら元の話題に

戻った。
「で、結局なんであの写真がお前になるんだよ。どう見ても体つきが違っただろ」
「あれは魔法なんだよ。性別が変わった自分がどんな外見になるのか、見ることができる魔法」
　俺の質問に、親友はようやく種明かししてくれた。
　とはいえ、魔法と言われても意味が分からん。
「何でもありかよ魔法。あ、てことはあれか。今ここであの姿になってみせることも可能なのか。いやでも、お前魔法なんて使えなかったよな？」
　異世界との接触以降、地球人の中にも魔法能力に目覚める者がいる。しかし、それはごく少数に限られた話だ。この学校にも実はいるらしいが。
「魔法は使えないし、今女の子の姿になるのも無理。あの魔法、というか実際には魔道具なんだけど、あくまでも性別が変わった自分の姿を映像として映し出せるだけなんだよ」
「ほぉ～。よくできたＣＧみたいなもんなのかね。で、何でそんなもん持ってるんだ？」
「そ、それは」
「うむ、それは？　続けて」
　俺が促すと、親友は躊躇いがちながらもそっと打ち明けた。

「性転換をしてくれる魔法クリニックが貸し出しをしてるんだ。その……セミナー受講者に」
「セミナー」
「えっと……正確に言うとセミナーを受けて本当に予約を入れたいと考えている人向けに」
「予約」
さっきから親友の言葉を繰り返すオウムと化している俺。
その様子に俺が怒っていると勘違いしたのか、我が親友は涙目で三度自分の発言を訂正した。
「実はもう予約……入れました」
ふむ。
予約を入れたということは、つまり我が親友は性転換魔法の施術を受けて女の子になる予定でいるということか。
不覚にも俺が勃起してしまったあの姿に生まれ変わると。
……何でや！
「ふざけんな！　キャンセルしろキャンセル！」
「駄目だよ、キャンセル料だってかかるんだから！」

「そんなもん俺が出してやるわ！　今からそのクリニック行くぞ！　オラ立て！」
「駄目だって！　それに午後の授業だってあるだろ」
「授業よりお前の体だろうが！　いいから来い！」
「ちょっともうっ。引っ張る力強いって！」
　こんな感じでギャンギャンやり合っていたら昼休憩も終わってしまったので、とりあえず俺たち二人は授業に戻ったのだが、屋上で俺たちの騒ぎを聞いていた連中が何をどう曲解したのか、放課後に神妙な表情をした保険医に呼び出されて何でも相談に乗るから早まっては駄目だと諭されてしまった。
　いかにも『私は理解があります』という表情をした保険医と向かい合いながら、誤解を解くために俺と親友がいわゆるそういう関係ではないことを説明しなくてはならなかった。
　なかなか信じてもらえなかったけどな。
　なぜか我が親友は誤解を解くのに協力的じゃなかったし。
　本当に何でや。

第4話

16センチ。それが俺のプライドだ。
何の話かって？
そんなもの決まってる。
ちんちんの長さの話だ。
突然の宣言に驚かれたことと思う。
だが俺が自らのちんちんの長さと、その存在に愛着と誇りを持っていることをどうしても表明せざるを得ない事情があるのだ。

昨日のことだった。
休日の昼間で、母ちゃんも父ちゃんも出かけていて自宅には俺一人しかいなかった。
すなわちやりたい放題パラダイスというわけだ。
貴重な時間を有効活用するため、いそいそと秘蔵のエロアイテムを取り出した俺は一

人きりの鑑賞会を始めた。右手はもちろん相棒に添えて。
そうして緊張と弛緩を繰り返しながらクライマックスポイントを探る作業を続けていたのだが、そこで唐突にスマホが着信を知らせてきた。
鳴り響くのは我が親友専用の着信音。
俺はスマホの画面を見つめ、ギンギンで我慢を強いられている相棒に視線を落とし、それから手を拭いた。
「おう。どした」
親友からの連絡を無視する選択肢は俺の中にはない。
たとえパンツをずり下げてちんちん丸出しの状態であろうともだ。
「特にどうってわけじゃないんだけど、何してるのかなと思って」
……恋人かな？
おかしいな、我が親友は俺と同じ男のはずなんだが。
「何してるっていうか、まあ、うん……」
いくら相手が我が親友といえども俺は口ごもってしまった。
今まさにオナニーの最中でしたというのはさすがに言いにくい。
力なくしぼんでいくちんちんを見て無性に肌寒さを感じた俺は、片手でパンツを引っ張り上げながら何と言って誤魔化そうかと必死に考えた。

「どうかしたの？　何かごそごそしてる？」
「いや、あー……パンツを穿こうとしてるだけだ」
しばらく考えた結果、俺は思考を放棄することにした。
そもそも一緒に性の扉を開いた仲だ。俺と親友の間で恥ずかしいことなんて存在しない。こともないが、もう面倒くさくなってしまった。
「……トイレ？」
我が親友の声が1オクターブ低くなる。
綺麗好きの親友にとってトイレ中にスマホの通話に出るという行為は許容範囲外なのだろう。
だが、いくら俺でも用を足している最中に電話に出たりしない。
「トイレじゃねえよ」
「そうだよね、いくらなんでも。それじゃ着替え中だったの？　ちゃんと着てから電話に出ればよかったのに」
しょうがないなぁという感じに笑いを含んだ我が親友の声を聞きながら、ようやく下半身の身だしなみを整えた俺も調子を合わせて笑った。
「ハハハ」
「あはは」

笑い合う俺と親友。
なぜだろう。ちゃんとパンツを穿いたはずなのにさっきから寒気が止まらない。
「……で、新しく見つけたエロ動画はそんなによかったの？」
「お前、エスパーかよぉ！」
俺は思わず叫んだ。
なんで分かるんだよ。振り向いたら後ろにいるんじゃないだろうな。
思わず後ろを確認し、ついでに天井を見上げて窓の外を窺っていると我が親友が低い声で言った。
「そんなきょろきょろしなくても後ろにも窓の外にもいないよ」
「やっぱりエスパーじゃねぇか！」
何で俺の挙動を正確に言い当ててるんだよ、こいつは。
「こんなのエスパーじゃなくても分かるよ。息遣いとかで」
「だから怖ぇよ！」
そんな感じでひとしきり騒いだ後、俺と親友はようやく落ち着いて話し始めた。
「大体さ、いきなり掛けた僕も悪かったけど、そっちだって何も律儀にあれの最中に出なくたっていいんだよ」
「何だよあれって。もっとはっきり言え」

「う……、べ、別に言わなくても分かるでしょ」
「俺お馬鹿だから分かりませーん。教えて下さーい」
「オ……オナ」
「え、もっと大きい声で言わないと聞こえねぇぞ。それでもタマついてんのかぁ？」
「うるさい黙れ早漏」
「そ、早漏じゃねぇし！」
早漏です。
……何で知っているんだよぉ。
我が親友の鋭すぎる言葉の刃にずたずたにされた俺は、そっと涙を拭った。
天使のような見た目をしていると評され、実際その通りなのだが、我が親友は時折結構な毒を吐く。
まあ、親友の妹ちゃんみたいに毒舌を標準装備しているわけではないんだが。
「からかってすんません」
「そういうの、本当にどうかと思う」
「は、おっしゃる通りです」
「僕相手だからいいけれど、他の人相手だったら絶対に喧嘩になるからやめた方がいいよ」

「そうだな。そうする」
「そうしなよ」
「うん。他の人にはやらない。代わりにお前のことを一生からかうことにする」
今さらからかわれて怒るような関係じゃないからな、俺たちは。
いや、その場では怒るかもしれないが相手に悪意があるわけじゃないって分かり切っているわけだし。
さっきもただ単にオナニーという単語を口に出すのを恥ずかしがっている我が親友の態度が面白くていじってみたくなっただけなんだ。
……冷静に振り返るとちょっと変態ちっくだな、俺。
でも我が親友の天使のようなくちびるの隙間から唐突にオナニーという単語が飛び出したら、クラスの女子の七割は卒倒すると思う。
それくらいの破壊力はある。断言しよう。
まあでも、どんなに見た目が天使のようでもいたって普通の少年なのだから、我が親友もオナニーくらいするけどな。
ところで俺の一生からかう宣言を聞いた我が親友がさっきから無言なんだが。
「おーい？」
「……そういうの、本当にどうかと思う」

「え？」
俺は思わず聞き返した。
断じて難聴系ではない。脈絡が理解できなかったのだ。
自分だって『僕相手ならいい』って言ったじゃないか。
しかし、親友は俺の疑問には応えず話を変えた。
「ところでさ、そんなによかったの？」
親友が訊いているのはおれが観ていた新作エロ動画のことだ。
やはりなんだかんだで興味があるんだな。
お主も男の子よのう。
「すっっっごいよかった」
「……そう」
「女優さんのおっぱいがまじにデカくてさ。声も演技臭くなくて可愛かったし。俺駄目なんだよな、演技してる感があると。まあ、映像だけでも抜けるっちゃ抜けるんだけど」
「ハッ」
うん、鼻で笑われた？
何だかものすごく辛辣な合いの手が入った気がしたけど、とりあえず俺は気にせず新作のよさを伝え続けた。

「というわけでさ、お前にも教えるから観てみろよ。俺もとりあえずこの後ももう一回観直すわ。まだフィニッシュしてないし」
フィニッシュ地点を探っている最中に電話が掛かってきてしまったからな。
俺の開けっ広げな言葉を聞き、我が親友は噴き出したようにも咳込んだようにも聞こえる、変な音を出した。
「おいおい、大丈夫か？」
美少年が出しちゃいけない音がしたぞ。
「だ、だいじょび……」
「だいじょびならいいが」
だいじょびならな。
「うるさい。早漏なら早漏らしくとっとと漏らしたらいいのに」
「お前、二回目だぞ！　それに俺は早漏じゃねぇ。ちょっと敏感肌なだけだ！」
「フッ、敏感肌って」
刺激に弱いんだよ。
だから日々鍛えているんだろうが。
「まあ、早漏かそうじゃないかはおいといて」
「おいとくんじゃねぇ。これは大事な問題なんだぞ」

男子の尊厳にかかわる問題だ。
早くても回復力がすごいならいいよね、とかそういうことじゃないんだよ。
「お・い・と・い・て。ぼくは気にしないよ。早漏でも」
見えなくてもどんな表情を浮かべているか分かる、まさに美少年オブ美少年ボイスで我が親友は宣言した。
ははは、こやつ何を言うてけつかる。
「気にしろよ。いくらちんちんがデカくても早漏だったらいつか彼女ができた時にがっかりさせるかもしれないだろうが」
「い、いや、だからね……」
親友が何か言おうとしていたが、それを遮って俺は続けた。
「正直に言ってサイズに関しては俺は悪くないと思ってる。割といい線行ってると思ってるんだ。でも持続力がなぁ。とはいえ俺のちんちんもまだ自主練しか経験したことがないというか、ぶっちゃけると童貞なのでいずれ本番に慣れればポチンシャル、いやポテンシャルを発揮できるかもしれないが……」
そこんとこどうなんスか、マイサン？
すっかり待機状態に戻った股間に無言の問いかけを送ってみたが、我が相棒はちーんと静まり返っていた。

「まあ本番をさせてくれる相手がいなくちゃポテンシャル（笑）も何もないよね。でも一人でする分にはいいんじゃないの？　時短になるし」

もう今日は下ネタの日なのだと諦めてしまったのか、かなり冷めた口調ながら我が親友は律儀に俺のたわ言に付き合ってくれる。

「時短とか言うの、悲しくなるからやめてくれない？　そういうことじゃないだろ、エロって」

「大きさも関係ないよね、一人だと。どんなに大きいか知らないけどさ」

その残酷な言葉に『関係なくないやい』と俺は内心で反論したかったが、正論パンチがレバーに深く突き刺さり過ぎて言葉が出てこなかった。

確かに俺の１６ｃｍ砲は自分以外誰も満たしてやることができない。相手がいないから。

仲良くなったバレー女子に恋していた頃は彼女とそういうことをする妄想をたくましくしていたものだが、あっという間に失恋した今となってはそんな妄想も、ちんちんが膨らんでも心はしぼむ虚しい代物に成り下がった。

俺が静かに悶絶していると、我が親友は何度か咳払いしてから妙に上ずった声で訊いてきた。

「そ、それはそれとして相当自信があるみたいだけど、何センチあるの？」

我が親友よ。
俺のチン長を知ってどうしようというのか。
などと意地悪なことを言うはずがない。
もしも俺たちの会話をクラスの女子たちが聞いたとしたら、卒倒どころでは済まないかも知れないな。逆に近所の奥様達は微笑ましく感じるかも知れないが……。
しかし俺も親友もごく一般的な男子だ。猥談の一つや二つくらいする。
その場で胸を張った俺は、とても他人には見せられないようなキモイどや顔で答えた。
「１６センチだ」
１６ｃｍなのだ。
計測方法やその日の体調によって多少増減はあるかもしれないが、間違いなく平均値は越えている。
デカチンとまでは言えなくとも充分にご立派と言っていいだろう。
しかし、親友の反応は微妙なものだった。
「ふ、ふぅん。そうなんだ。大きいね……」
俺のサイズを聞いた親友は明らかに対応に困っており、何かを誤魔化している感がすごかった。

いや、何でや。
お前が訊いたんじゃないんかい。
「16センチ。そっか。……それくらいなら大丈夫、かな」
我が親友が何かぶつぶつ言っているようだが、そんなことより今の俺には言わねばならないことがあった。
「……なあ、俺たち親友だよな」
「ど、どうしたんだよ、突然。そんなの決まってるよ」
何だかくすぐったそうにくすくす笑う親友をよそに、俺は冷めきった声で続けた。
「俺は自分のちんちんのサイズを告白した。だったらお前も教えてくれるよな？」
「え」
「親友だもんな、俺たち」
「え、えぇ～。まあ、いいけどぉ……」
我が親友はしばらく電話の向こうで『ああ』とか『うう』とか唸りながらもじもじしていたが、ついには意を決して自らのサイズを口にした。
「じゅ、じゅう……」
「じゅー？」
「……18センチ」

あまりにもか細い、少女のような囁き声で我が親友は爆弾投下した。
木っ端みじんに吹き飛ばされた俺の脳細胞が再び集結して出来の悪い脳みそが再稼働して、ようやく親友の申告数値を咀嚼理解すると、俺は叫び声を上げた。
「ジューハッセンチ!? え、１８センチ!? 嘘だろその顔で?」
「か、顔は関係ないもん……」
親友の声はほとんど泣き声だった。
「あ、いやすまん。別に責めてるわけでも馬鹿にしてるわけでもなくてだな。いやでも１８センチ……。俺の方が１５センチくらい身長高いのに。比率狂ってんだろ」
ちなみに我が親友の身長は１６２ｃｍである。
いや、やっぱり比率おかしいって。
「狂ってない……ちょっと大きいだけだもん」
「ホントごめん。あまりに衝撃的過ぎてな。あ、童貞だよな?」
「童貞だよ。いつも一緒にいて彼女なんかいないの知ってるでしょ」
我が親友の答えに俺はほっと胸を撫でおろした。
よかった。
彼女がいないのは知っていたが、我が親友には夜の電灯に吸い寄せられる虫みたいに年齢問わず異性が群がるからな。知らない間にあっさり食われていても何ら不思議で

はない。
それにしてもまじかよ。
つい先ほどドヤって『１６センチだ』とか言っていた自分が恥ずかしすぎて死にたくなる。
これで我が親友の１８ｃｍ砲がすでに経験済みだったとしたら立ち直れなくなるところだった。
しかし１８ｃｍもあるとなると、学校の一部女子たちが製造しているおぞましい書物の描写はわりと的を射ていることになるんでは？
でも俺の尻穴にそんなデカチンは入らないし、入れさせないけどな。
「だから言いたくなかったんだよ」
うらめしそうな親友を慰めるためにあえて明るい口調で俺は言った。
「いいじゃないか。お前の彼女になる子はきっと喜んでくれるぞ。大きすぎるとかえってよくないって話も聞いたことはあるけど、たぶん大丈夫だって！　後は持続力を鍛えなきゃな！」
打倒敏感肌だぜ。
「何の慰めにもなってないし口下手すぎるけど、ありがとう。でも、いいんだ。どうせこんなのなくなるんだし」

「ん？」
「え？」
今何か親友が恐ろしすぎる言葉を口にした気がして、俺は思わず疑問の声を上げてしまった。
ドウセコンナノナクナル？
ナニソレ？
脳が理解を拒むのだが、我が親友は無情にも俺にとどめを刺そうと少し恥ずかしげに、そして誇らしげに言った。
「だって僕、女の子になるんだもの」
俺は叫んだ。
心の底から、ネタでも何でもなく。
「それを捨てるなんてとんでもないっ!!!」

第5話

ただいま絶賛喧嘩中である。
誰とだって？
もちろん我が親友とに決まっている。
他人に言うと驚かれることがよくあるのだが、俺と親友だって普通の人間に過ぎないし、喧嘩する時はする。むしろ小さな頃から数えきれないくらいに喧嘩を繰り返してきたと言ってもいい。
仲直りの回数もそれと同じ数なんだが、それはどうでもいい情報だな。
さて。
喧嘩中である。
原因は何か。
それは我が親友が性転換したい理由をいまだに俺に話そうとしないことだ。
正直に言おう。
我が親友が性転換して女性になることについて、個人的には嫌だと思っている。

何ならキャンセル料を俺が払ってもいい。俺の小遣いではまったく足りないから残る高校生活はバイト漬けになる必要があるが、それでも構わない。
そう伝えたが、我が親友は断固として聞き入れようとしなかった。
絶対に性転換して女の子になる。
親友の揺るぎない一念を突き崩すことが俺にはできずにいる。
こんな意固地になった親友は、幼稚園時代以来だ。
しかし、性転換が嫌だと思っているのはあくまでも俺の都合であって、親友にも親友の都合と事情があるのは当然なのだから、どうしてもそうするのなら仕方ないとも理解している。
理解しているし、受け入れなければならないと分かっている。
近いうちに俺の親友は女の子になるのだ。
泣こうが喚こうが予定された現実は変わらない。
ある日突然魔法を含めた異世界文明の産物がこの世界から消えてなくなるみたいな、降って湧いたような奇跡が起きない限りは。
我が親友はいずれ女の子となって俺の前に立つだろう。
間違いなく巨チンを持ち神に祝福された美少年である姿から、たぶん巨乳をぶら下げて世界を震わす美少女になった親友が。

その姿を前にして俺は気絶するかもしれない。あるいは泣くのだろうか。怒るのだろうか。

よく分からない。

最近一日一枚のペースで送られてくる、魔法の道具で女の子姿になった我が親友の写真を眺めて自分が何を感じているのかもよく分からないのだ。

だけど、俺は受け入れるだろう。

だって彼は、あるいは彼女は、俺の親友だからだ。

しかし、だからこそ許せないことがある。

性転換することじゃない。

その理由を決して俺に話そうとしないことだ。

他の誰でもない、この俺に。

それだけが納得できないし、許せない。

だから俺は喧嘩したし、それは今も継続中だ。

もう三日も口を利いていない。近くにいるにもかかわらずこれほど長く言葉を交わさないのは初めてかもしれない。

いつもなら屋上の定位置で二人一緒に弁当を食べる学校の昼休憩も、今日は一人だ。

うむ、我が母ちゃん謹製の豚バラ大根が今日もしみじみ美味い。

一人で食おうがどうだろうが美味いものは美味いというのは、残酷なものである。
俺が一人で弁当を食っているのなら、我が親友はどうしているのかって？
そんなの知らん。
今も何だか俺と背中合わせに座ってどこかの誰かが弁当を食っているが、俺には関係ないことである。
我が母ちゃんの愛情が詰まった弁当をもそもそと無言で食べていると、視界の中に女子の足がにゅっと現れて喋った。
「ここ、いい？」
いきなり話しかけられた俺が若干ビビりながら顔を上げると、目の前にはいつぞやのサムズアップ女子がピースしながら無表情でこちらを見ていた。
いつぞやのも何もクラスメートなので毎日顔は合わせているのだが。しかし、直接話したことはほとんど記憶にない。
「お、おう。別に……」
いかん、虚を突かれたせいでつい童貞臭い反応をしてしまった。
まあ薫り高い童貞なんだが。
俺の許可を得たサムズアップ女子改めピース女子は、『失礼します』と律儀にお辞儀をしてから俺の真正面に腰を下ろした。

その座り方というのが男の俺から見ると何とも形容しがたい、腰とか脚の関節とかを壊してしまいそうなめちゃくちゃな体勢なのだが、それでいてちゃんと安定して座っているから意味が分からない。

女子の骨格やら筋肉やらは一体どうなっているんだ。

というか我が親友も女の子になるとこんな体勢ができるようになってしまうというのか。

スカートの裾をちゃんと防御するピース女子の仕草をアホ面でボケっと眺めていると、彼女は大きく頷いてみせた。

「うん」

うん？

何が、うん？

対応に困る俺の手元にある弁当を覗き込んだピース女子は、両手を使ってハートマークを作りながら言った。

「お母さん、すごいね」

知ってる。

「豚バラ大根、好きなの？」

「そうだけど……、いるか？」

俺がピース女子改めハートマーク女子に問いかけた直後、いきなり背中側から衝撃に襲われた。はっきり説明すると、背中合わせに座っている誰かが肩だか背中だかをぶつけてきたのだ。

いや、何でせなパンされなくちゃならんのだ。意味が分からん。

理解不能で正体不明な背中合わせ野郎と背中合わせの攻防を続ける俺に、ハートマーク女子は淡々と答えた。

「ううん。美味しそうだけど遠慮しておく。お箸持ってきてないし」

それは俺の箸を使うことによって必然的に発生する間接キスが嫌という意味だろうか。

一瞬思考の沼に沈んで動きが止まった俺はいい一撃をもらって前のめりになってしまい、自分でやっておいて驚いたのか背中合わせに座る謎の人物も動きを止めてしまった。

「ご飯中は暴れちゃ駄目だよ。お弁当を引っ繰り返したりしたらお母さんが悲しむ」

「……大人しく食べます」

「いい子」

ハートマーク女子は無表情のまま俺の頭を撫でる仕草をした。

何だろう、このやりにくさ。

同じ女子でもバレー女子は反応が分かりやすくて話すのに気が楽なのだが、ハートマーク女子は不思議ちゃんなのか予測のつかない言動をしてくるので戸惑いが勝ってしまう。

無表情だから分かりにくいが顔立ちはかなり整っていて可愛いのに、これでは誤解されてしまうことも多そうだ。事実、男子の間ではハートマーク女子はまったく人気がない。

まあ、俺はすでに恋に落ちそうですけど。

「駄目」

「は？」

いきなりの言葉に俺が訊き返すと、ハートマーク女子は目を細めて俺を睨むような、全然怖くない表情をした。

かわE。

「そういうところ」

「そういう？　どういう？」

意味がまったく分からず、思わず背中合わせの人物に問いかけようと振り返りかけた俺は、天使の輪っかが浮かんださらさらヘアーが視界の端に入り込んだ時点で間違いに気付いて振り返るのをやめた。

危ない危ない。
だが上手く誤魔化したのでハートマーク女子からはちょっと大げさに首を回したようにしか見えなかったはず。
無表情系女子であるハートマーク女子が若干笑いを堪える表情をしているようにも見えるが、気のせいだな。
「すまん。さっきからよく話が分からないんだけど」
「うん、そうだね。分かるように話してない私が悪い。ごめんなさい」
ぺこりと頭を下げられて、こちらもつられて頭を下げた。
「あ、いや。別に悪いとかそういうんじゃないんだが……」
「分かるように話すから、放課後に少し付き合ってほしい」
「ふ？」
これまで創作物の中にしか存在しないとばかり思っていた言葉を投げ渡され、俺の口からよく分からない音が出た。
無様な俺の反応を見ても無表情のまま、ハートマーク女子は立ち上がって俺を見下ろした。
「安心して。告白じゃないから」
そこは『安心して』ではなくむしろ『がっかりして』では？

　つい俺が頭の中で考えると、無表情系ハートマーク女子は今度こそはっきりと微笑を浮かべて宣言した。
「ううん。『安心して』で合ってるよ。お二人さん」
　彼女の言葉の意味するところを咀嚼するために動きの固まった俺と、俺の後ろで息をひそめるようにして背中を合わせている人物に向かって、ハートマーク女子はスカートの裾を少し摘まみ上げるカーテシーをしてみせてから悠然と歩き去っていった。
「な、何なんだあいつ……」
　無意識に出てきた言葉と共に俺は後ろを振り返り、同じようにこちらを見ていた我が親友と間近から見つめ合った。
「……ぷい」
　が、すぐに我が親友が他人を馬鹿にした擬音と共に顔を背けよったので、流れるように背中合わせの攻防戦ラウンド2の火ぶたが切って落とされた。

第6話

これまでの人生で俺が立ち入ったことのある女子の部屋というのは、唯一我が親友の妹ちゃんの部屋だけである。

しかし今、俺は自らの人生を更新した。

これがどういうことか分かるだろうか。

現在の俺のいる場所。

それは人生で二人目の女子の部屋だ。

フローラル。

混乱のあまりたどたどしい翻訳文のようになったことを謝罪する。

しかし、それほどの衝撃であることは強調しておかねばなるまい。

さて。

事の経緯を説明しよう。

昼休憩に俺を混乱の渦に突き落としたハートマーク女子だが、彼女は宣言通りに放課後になると俺の真正面に立った。

「一緒に来て」
「んあ」
動揺のあまりうまく返事ができない俺。
ハートマーク女子と仲良しグループを形成している『たまらん』一派が何やらざわついているが、そんなものどこ吹く風とばかりに彼女は俺を急かした。
「早く」
「ふぇ」
いかん。
焦ってカバンに教科書を突っ込もうとしたら床に落としてしまった。
その場に膝を突いて教科書を拾う俺を蔑むような冷たい眼差しで見下ろす無表情系ハートマーク女子。
俺の胸の奥深くで何かが高まる音がした。
と思ったのだが、俺のすぐ脇にしゃがみ込んで一緒に教科書を拾い始めた我が親友の姿を見るとすぐに紛れてどこかへ行ってしまった。
さようなら、俺の中のいけない高まり。
そして我が親友よ。
教科書を拾ってくれるのはありがたいし優しいが、何でそんなに肩を擦りつけてくる

ん？

猫ちゃんかな？

そんな密着する必要ある？

お前がぎゅうぎゅう押すからよろけないよう踏ん張らなくちゃいけないんだが。

ふと上を見あげると、ハートマーク女子が味わい深い無表情でこちらを見下ろしながらサムズアップしていた。

……分からん。

分からんが俺もサムズアップを返しておこう。

意味不明のやり取りを経てようやく帰宅の準備を整えた俺はハートマーク女子に向かって言った。

「いいぞ。行こう」

よし、今度はちゃんと喋れた。

颯爽とカバンを肩にかけた俺に無表情の頷きを返したハートマーク女子は、次に俺の隣へ視線を移してそこにいる人物を見た。

「あなたは来ないで」

「っ！」

我が親友、絶句。

絶句である。
こんなにも分かりやすく見事な絶句をしている人をこれまで見たことがない。
教室のそこかしこから女子たちの悲鳴が上がったが、放っておこう。
我が親友は泣いているんだか怒っているんだか、それとも不貞腐れているんだかよく分からない、複雑極まりない表情を浮かべていた。
しかし、それでもなお美少年ぶりはいささかも損なわれていないのがすごい。俺だったらただの変顔になるだけだろうが。
「来ないで」
「っ!!」
ハートマーク女子の追い打ちに我が親友、再びの絶句。
何だかよろけそうになっているから肩を支えてやる。
喧嘩中じゃなかったのかって？
そうだが？
それにしてもさっきから教室の悲鳴がうるさいな。
「俺だけに話があるんだな？」
「そう。大事な話」
俺の問いかけに対し、ハートマーク女子はなぜか我が親友と見つめ合いながら答え

た。
「お昼にも言ったけど告白じゃないから心配する必要はない。それじゃ行きましょう」
「お、おう」
告白のほうがむしろ嬉しいんだが、なぜそんなにも告白ではないと強調するのか。
……ははーん、照れ隠しだな？
と思いたいところだが、俺は自分のことをよく分かっている。我が親友と違って俺はモテるタイプの人間じゃない。
告白じゃないなら話って何なんだろうな。
「ついて来て」
スタスタと教室を出て行くハートマーク女子の後を追いかけ、扉の前で一度振り返った。
親友が何か言いたげにこちらを見ていた。
俺は口を開こうとし、喧嘩中だったことを思い出してから軽く手を振った。
「後でな」
「うん」
俺たちは親友だ。
仲直りするのに余計な言葉なんて必要ない。

これまでも、これからも。

連れていかれたのは閑静な住宅地の中にある一軒家。
はっきり言うとハートマーク女子の自宅であった。
「入って」
玄関を開いて振り返ったハートマーク女子が、グズグスする駄犬を叱りつけるような口調で言った。
「え、でも」
展開についていけなくて初心な乙女のような反応をしてしまう俺。
しかしハートマーク女子は有無を言わさず俺の手を取って家の中へと引っ張り込んだ。
何てことをするんだ。
手なんか握ったら好きになっちゃうだろうが。
「手を握ったくらいで大げさ」
「そんなこと言ってもお前の手、ちっちゃいし」
柔らかいし、いい匂いがするし。

「あなたの親友と大して変わらないわ。いいから靴を脱いで上がって」
「靴脱いだら足くさいかも」
というか靴下の指のところが破れていた気がする。
朝着替える時に気付いたけどそのまま履いて来てしまった。
恥ずかしい。
「私のお父さんも足はくさい。それに靴下の穴くらいで笑ったりしないから」
だから気にしないで家に上がれ、とハートマーク女子は俺を促した。
しかし彼女と手を繋いだまま、俺は動けなくなっていた。
ゆっくりと顔を上げ、目の前の人物を凝視する。
「……実は昼から気になっていることがあるんだが」
「正解」
先を続ける前にハートマーク女子は答え、にっこりと笑みを作った。
その笑顔は抜群に可愛くて、あり得ないほど魅力的で、そして背筋が凍るほどに恐ろしかった。
たぶん、悪魔とか魔女とか呼ばれる奴の笑顔はこんな感じなんだろう。
「信じられないくらい失礼。でも推しだから許してあげる」
推し？

推しってどういうことだ？
無表情に戻ったハートマーク女子がくいくいと手を引っ張るので、観念した俺は靴を脱いで靴下の穴を隠すためつま先を丸めた状態でそっと足を上げた。
「お邪魔します……」
「さあ、早くこっちに……」
相変わらず俺の手を握ったまま先導しようとしたハートマーク女子は、何かを感じ取ったように言葉を途切れさせると小さくため息を吐き出した。
「だから早くって言ったのに」
何のことかと思っていると、とんとんと階段を下りる足音が聞こえてきて、ハートマーク女子そっくりなお姉さんが姿を現した。
「あらやだ。妹が彼氏をウチに連れ込んでるわ」
「彼氏じゃない」
語気強めで反論するハートマーク女子。
もうちょっと恥じらいながらでもいいんだぞ？
そんなに力強く否定されると事実でも傷つくから。
妹の様子をにやにや眺めているお姉さん。
雰囲気からして大学生くらいだろうか。顔立ちはそっくりだが、妹と違ってお姉さん

のほうは表情豊かだ。
　というかすごい美人。
「あまり見ては駄目。目がただれる」
　身内に対してその言い草はないのでは？
　と思ったのだが、お姉さんは気にした様子もなくからからと笑っている。
「妹の彼氏を取って喰いやしないわよ。ねえ、君？」
「ぴっ」
　流し目を寄こされ、全身にぶわっと鳥肌が立った。
　……大人の女の人、怖い。
「君、名前は？　同級生なの？」
「お姉ちゃんが知る必要はない」
「相変わらずけちんぼね。分かった分かった。邪魔者は消えますわよ。ゴムがいるなら私の貸してあげるから使いなさいな」
「お姉ちゃん！」
　これまで聞いたこともないような感情露わな大声でハートマーク女子が抗議したが、お姉さんは気にした様子もなく俺たちとすれ違って玄関で靴を履いた。
　やべぇ、すれ違いざまにめちゃくちゃいい匂いがした。

などと考えていたら、ハートマーク女子が俺と繋いだ手に万力のような力を込めた。
「息吸わないで」
「吸わなかったら死い痛たた」
ハートマーク女子は見かけに寄らずパワー系女子らしい。
すごく痛いんですが。
「優しくしてあげてね。妹は処女だから」
扉に手をかけたところで振り返ったお姉さんの爆弾発言に俺は固まり、ハートマーク女子は激昂してスリッパを投げつけた。……いや、手にスリッパ持ってたか、今？
華麗にスリッパを躱したお姉さんはけらけら笑いながらそのまま出かけて行った。
しんと静まり返る家の中。
明らかに他の人の気配がしないんですが、もしやお姉さん以外のご家族はご在宅でなかった？
その状況下でああいうジョークをぶっ込むのかよ、お姉さん。
やっぱり大人の女の人は怖い。
ともあれ気まずい空気を何とかしようと頭をひねった俺は口を開いた。
「気にするなよ。俺も童ｔ」
「知ってるから黙って」

ぴしゃりと遮られて俺は黙った。
相手が我が親友ならもう少し切り返しに手心があるんだが、やはり女子だと勝手が違う。
難しいものである。
というより、どうして俺が童貞だと知っているんだ？
「……来て」
珍しく疲れ切った声でハートマーク女子が促す。
相変わらず顔は無表情だが。
「どこに？」
「私の部屋」
「ぴゃあ」
嘘やろ。
俺が女子の部屋に？
もしかして今日死んでしまうん？
「無駄に恥ずかしがらなくていいから、そのくさい足を動かしてついて来て」
「ひどすぎない？」
確かにくさいかもしれないけどさ。

しかしハートマーク女子に手を引っ張られながら俺は悟った。
この調子では色っぽい展開は絶対に来ない、と。
なぜかそのことに心のどこかで安堵を覚えていると、ハートマーク女子がこちらをちらりと振り返って笑った。

第7話

「例えばの話なんだけどさ、母ちゃん」
「んー？」
「本当に例えばの話だからな、勘違いすんなよ」
「分かったから早く言いなさい」
夕飯の準備をしている母ちゃんを俺は食卓からぼけっと眺めていた。
手伝いをしないのかって？
皿だけ並べて後は邪魔だから座ってろと言われたんだよ。
「もし俺が女になりたいって言ったらどうする？」
逡巡した末に投げかけた俺の問いに対して、母ちゃんは片方の眉を軽く吊り上げて訝しげにこちらを一瞥すると、あっさりと答えた。
「考え直しなさい」
「だよなぁ」
ため息を吐き出す俺の目の前に湯気を立てる唐揚げが載った大皿がどんと置かれる。

「何かあったの？」
「何かっていうか、いやまあうん、俺の……知り合いのしん、友達がさ」
「知り合いの友達が？」
　美味そうな唐揚げをつまみ取ろうとする俺の手を母ちゃんがぺいっと叩いた。
「そいつがさ、性転換して女になりたいって言ってるんだって」
「ふぅん、知り合いのお友達がねぇ」
「そう、知り合いの友達が……」
　もちろん、俺が言っているのは我が親友のことだ。
　母ちゃんは一瞬だけ『あ、察し』って感じの表情を浮かべたが、特にそれに触れることなくきびきびと夕飯の準備を続けながら、さばさばした口調で言った。
「まあ個人の自由なんじゃないの？　今は自分で好きな性別を選ぶ時代なんだし。未成年の子なら保護者の同意はいるけども、男の子では居づらい事情があるとか女の子にならなくちゃ得られないものがあるとか、本人の中でちゃんと理由があるならなればいいじゃない」
　言葉にされるととんでもない時代だな。
　何だよ、好きな性別を選ぶって。それでラノベみたいな男女比１対９の世界とかになったらどうするんだ？

と言いたいところだが、実際には人類もそこまで馬鹿じゃないのか、性転換魔法を手に入れても世界人口の男女構成比には特に変化はない。
「……じゃあ何で俺には考え直せって言ったんだよ」
「あんたの場合、女の子になる大変さを絶対舐めてるからよ」
「ええ……？」
母ちゃんから息子への評価が辛口な件。
確かに女の子になったらどういう大変さがあるのかとか、あまり考えたことはないけども。
大変なのかな。
いや、大変なんだろうな。
生理とかつらいって言うし。周囲からの見方だって１８０度変わるわけだしな。
我が親友はその辺りをどう考えているんだろうか。
「母ちゃんは男になりたいと思ったことはある？」
「ないよ」
我が母ちゃん、即答である。
「男は楽そうとかズルいとか、そういうの考えたこともない？」
「それはないとは言わないけど、だからって男になりたいかって言われたら話は別。大

体母ちゃんが男になったら父ちゃんが女にならなくちゃいけなくなるでしょ」
母ちゃんが斜め上のボケをぶちかましてきたので俺は乾いた笑いを浮かべて受け流すことにした。
というか男になっても当たり前のように父ちゃんと夫婦を続ける設定になっているんだが。
愛、なのか？　よく分からん。
ちなみに夕飯の準備がちょうど出来上がるくらいの時間に仕事から帰宅した父ちゃんにも『もし俺が女の子になりたいと言ったら』と同じ質問をぶつけたところ、『父としてはちょっと寂しいけど望むようにすればいいと思う』と前置きした後にこうのたまった。
「もし本当に女の子になるのであれば、巨乳であってほしい」
言い放った瞬間、『子どもに変なことを吹き込むな』と母ちゃんにどやされていた。
オープンスケベな父ちゃんは気にせず笑っていたが、自分の胸にでっかいおっぱいがぶら下がっているところを想像した俺は笑うに笑えなかった。
巨乳をありがたがるのは本当に男の都合でしかないんだな。
男がでかいちんちんにプライドを持つように、自分の巨乳やスタイルに自負心を持つ女の子ももちろんいるだろうが、それ以外のメリットがほとんど思い浮かばない。

重いし、動きにくいし、走ると痛いし、サイズの合う下着も限られる。らしい。
それに四六時中男からいやらしい視線を向けられる。
「女の子になりたい……か」

父ちゃんが巨乳好きを表明して母ちゃんにどやされるより遡ること数時間。
俺は小綺麗でファンシーなぬいぐるみとかが置いてあっていい匂いがする部屋で、ハートマーク女子と対峙していた。
「話を始める前にあなたの疑問に答えるよ」
ハートマーク女子の眼差しがまっすぐに俺を射抜く。
「あなたが想像している通り、私は他人の心が読める」
心が読める。
んな馬鹿な話、フィクションじゃあるまいし……。
と鼻で笑うことはできない。
なぜなら異世界文明との接触以降、この世界の人間の中にも魔法を扱える者がごく少数ながら生まれるようになったのは、歴とした事実だからだ。

一口に魔法と言っても様々な種類がある。
それこそファンタジーでおなじみの炎や氷による攻撃魔法から空を飛ぶ飛翔魔法、果ては性転換魔法なんてものまであるのだ。心を読むくらい当たり前にやってのけるだろう。
そういえば俺たちが通っている学校にも魔法使いがいるという噂があった。
あまり信じてはいなかったのだが、もしかしてそれはこのハートマーク女子のことだったのではないだろうか。
「それも正解」
ハートマーク女子が俺の思考を読んで先を続ける。
「私は魔法が使える。読心術はその一部だよ」
彼女が手をかざすと、部屋の隅に置いてあったぬいぐるみがひとりでに浮かび上がり、ゆっくりとこちらに飛んできた。
可愛らしいというにはいくらか微妙なタコかクラゲみたいなぬいぐるみが、俺とハートマーク女子との間に静止する。
「この子はメンダコのジャン・リュック」
「ジャン・リュック……」
どこぞのイギリス英語をしゃべるフランス人艦長みたいな名前だ。

メンダコってのは確か深海生物だったかな。
魚とか好きなんだろうか。
「うん、好き」
口に出していない俺の思考にハートマーク女子が返事をする。
と同時にジャン・リュックが直進してきて俺の顔にぼふんとぶつかって跳ね返った。
「で？　魔法が使えるのは分かったしすごいと思うけど、それが俺に何の関係がある？」
顔の周りをくるくる周回しているジャン・リュックを手で追い払いながら俺は質問した。
「ここからが本題。私にはもうあまり時間が残されていない」
ハートマーク女子の表情に乏しい顔がかすかに愁いを帯びる。
「今学期の終わりに私は魔法使いとして異世界へ派遣される。そしておそらく二度とこの世界へ帰ってくることはないと思う。だからその前に……」
メンダコのジャン・リュックが俺の頭にちょこんと乗っかった。
「その前にせめて、推し同士が結ばれるところをこの目で見届けたいの」
「……ん？」
聞き間違いかな。

ものすごいシリアスな内容な前半の発言と後半が上手く繋がらないんだが。
それ以前に突っ込みどころが多すぎる。
何だよ、異世界に派遣とかもう二度と戻ってこれないとか。
ハートマーク女子は実は勇者だとかそういう話なのか？
急に頭痛がしてきた俺は親指の腹で眉間をぎゅっと押さえた。
「うん、別に勇者ってわけじゃないんだけど。いきなりこんなことを言われても意味が分からないよね」
「当然のように俺の心を読んで会話するのやめない？」
「まず最初から説明するからその辺……えっと、ベッドに座って」
無視かよ。
そしてベッドに座るってハードル高いんだが。だって女子のベッドだもんよ。
我が親友が俺の部屋に来ると大体いつも俺のベッドに寝転ぶのとはわけが違うんだぞ。
「ありがとう」
唐突に礼を述べながらサムズアップするハートマーク女子。
「は？」
「何でもない。それより気にせず座って」

そう言うなり、ハートマーク女子はジャン・リュックを動かすのと同じように俺の体を魔法で動かして強引にベッドの上に座らせると、自分もその隣に腰を下ろした。

ふっかふかやん。

嘘やろ、俺の人生でこんなこと起きていいんか？

やっぱり俺、今日死んでしまうん？

「大丈夫。あなたは死なないし、お姉ちゃんが言っていたようなことも起こらない。こうしてジャン・リュックもいるし」

ほら、という風にハートマーク女子が指し示すほうへ視線を向けると、俺たち二人に挟み込まれるようにしてジャン・リュックもちょこんと座っていた。

可愛い面構えだが、その心中は『ご主人様に手を出すつもりなら、この俺の屍を越えていけ』ってところか。

そんな馬鹿なことを考えていると、ハートマーク女子がくすりと笑った。

「どちらかというと『僕も仲間に入れてよ』だと思う」

「さっきも言ったけど心の声にレス返すのやめません？」

「イヤ」

ハートマーク女子はにやぁっと魔女のように笑った。

見るのは二度目だが、顔立ちは整っているのにめちゃくちゃ怖い。

というより笑顔作るのが下手すぎない？
無表情系キャラやめればいいのに。
凍り付いた表情筋を溶かすのに我が親友を貸し出そうか？
あいつの美少年オーラを間近から浴びたら鉄仮面でもどろどろスライムみたいになるぜ？
「他人の顔を勝手にスライムにしようとしないで」
抗議するようにジャン・リュックが俺の腰に体当たりする。
「悪かったって。それより話を戻そうぜ」
「そうね。わけが分からないだろうから、一応私の事情についてもかいつまんで説明する」
そうしてハートマーク女子は語り始めた。
要約すると、ハートマーク女子は魔法を使える戦力として異世界へ送られるらしい。交換にこの世界が得るのは、魔法をはじめとする異世界の技術や資源。
これは一般には公にされていないのだが、俺たちが接触した異世界はまた別の異世界と現在戦争をしているそうだ。ちなみに戦争相手の異世界の住人というのが、地球でいうところのゲームのモンスターやら魔物の姿をしているという。
さしずめ魔王軍と戦争する人類軍といった感じなのだろうか。

戦争には数多くの将兵や兵器が投入されている。当然、魔法使いもだ。

一口に魔法使いといっても様々にいるが、あちらの世界では武闘派魔法使いをランク分けしているらしく、こちらの世界風に言えば上からS、A、B、C、Dといった具合だ。

ハートマーク女子の武闘派魔法使いとしての潜在能力は、何とAランク。

Sランクというのは世界に一人いるかいないかという伝説と肩を並べられるほどの実力者でないと割り当てられないそうなので、Aランクが実質トップということである。

泥沼の消耗戦を強いられている異世界からすれば、喉から手が出るほど欲しい人材というわけだ。

異世界側は強い魔法使いが欲しい。こちらの世界側は異世界の技術や資源が欲しい。

まさにウィンウィンの関係という奴だ。

取引に使われるハートマーク女子の人権？

んなもんあるわけがない。女の子一人引き渡せば、世界が一段階進化するんだぜ。

過去にも取引材料として異世界へ送られた人間は数多くいるそうだが、世間一般には一切知られていない。今普通に俺はこの話を聞いているわけだが、もしも口外したら政府に消されるから気を付けてと軽い調子で忠告された。

かくしてハートマーク女子は今学期が終われば異世界へと送られて、そこで勇者とか呼ばれているイケメンが率いるパーティーに配属されるのだそうだ。

ちなみにこの勇者パーティー、勇者本人以外は全員女。どういう意図があるかあまりに露骨で何かの冗談ではないかと言いたくなる。

ラノベテンプレを現実でやられるとドン引きという感想しか出てこないな。

そんなわけで異世界転移して勇者ハーレムの一員となり、魔王をぶっ倒すというラノベ真っ青な人生の設計図を押し付けられたハートマーク女子が、せめてその前に叶えたい願い事。

「推し同士が結ばれるところをこの目で見届けたい」

うん、意味が分かりませんね？

「現実逃避はよくない」

諭すようなしたり顔で言ってくるハートマーク女子の鼻をつまみ上げてやりたい。

と考えたところで、俺の鼻目掛けてジャン・リュックが体当たりしてきやがった。

「違うから。いや、お前相当おかしいこと言ってるからな？　大体推しって何のことだよ？」

ぼすぼすと顔に当たってくるジャン・リュックを手で振り払いながら俺が訊くと、ハートマーク女子はそこそこ膨らんだ胸元に両手を添えて囁くように答えた。

「推しは推し。あなたとあなたの親友が私の推し。これまでずっと見守ってきた」
衝撃の告白を受け、俺の全身に鳥肌が立った。
え、こいつ無表情のまま仄かに頬を染めてるぞ。怖っ。
俺の失礼な思考を読み取ったのか、ジャン・リュックが錐もみ回転しながらぶつかってくる。
手で追い払おうとするが、めちゃくちゃ力強くて押し返せない。
なるほど、これを刃物でやられたら簡単に死ぬわ。
そう考えた途端にジャン・リュックが落ちて床に転がる。明らかに俺の失言のせいだ。いや、声に出してないけど。
「……悪い」
「気にしないで。私が勝手に心を読んでるだけだから。思考するのはあなたの自由」
緩くかぶりを振ったハートマーク女子が『あと私の胸はそこそこじゃないから』と言ってきたので、もう一度俺は謝罪した。
さっきは鳥肌を立てたり怖がったりしてみたが、実際のところ俺たちがそういう対象として見られるのは別に初めての経験というわけじゃない。
何といっても俺と親友がぐちょぐちょに絡み合う地獄のような書物があるくらいだからな。

……ん？

「おい待て。推しだ何だはとりあえずおいておくとして、結ばれるっていうのはどういうことだよ」

「言葉通りの意味だけど？」

不思議そうにこてんと首を傾げるハートマーク女子。

不覚にも可愛らしさを感じるが、普段から我が親友で慣れているためかそこまで動揺せずに済んだ。

何しろ我が親友より可愛い女子を見たことがないからな。悲しいことに。

「悲しくない。素敵なこと」

「素敵じゃねーよ。どんなに可愛くてもあいつは男だろ。俺は女の子が好きなんだよ」

俺が反論すると、ハートマーク女子は生真面目な無表情顔でしっかりと頷いた。

「そう。それが問題だった。男の子のままではあなたは一生振り向いてくれない。こんなにも、こんなにも彼はあなたを愛しているのに」

「愛って……そりゃ俺たちは誰よりも仲がいいし大親友だけど、何でもかんでも恋愛に結び付けられたらたまったもんじゃねぇよ」

これだから女子ってのは。

妄想するのは自由だが、せめて二次元の中だけにして現実に持ち込まないでもらいた

いものだ。
　俺が内心で並べ上げる非難が聞こえているのだろう、ハートマーク女子は誰が見ても分かる悲しげな表情を浮かべて、ゆっくりと首を横に振った。
「そうじゃないよ。だって、私はずっと知らなかったもの」
「知らなかった？」
「初めて聞いた時、こんなにも美しい想いがこの世に存在するのかと感動せずにはいられなかった。彼の『声』は誰よりも大きく純粋で、一片の迷いもなかった。人の心というのはほとんどの場合、ぐちゃぐちゃの支離滅裂で矛盾だらけなんだ。とてもではないけど、美しいだなんて思えない。でも彼は、彼だけは違ったの。望まない魔法の力で荒み切って閉ざされていた私の心を、彼の『声』が癒してくれたんだよ」
　ハートマーク女子が手のひらを上に向けると、そこにジャン・リュックがちょこんと乗った。
「でも、だからこそ彼が苦しんでいるのが耐え難かった。途方もなく大きな想いを抱えながら、それが決して叶うことがないと日々自覚して血の涙を流すような彼の『声』を聞くことがつらかった。彼はただ……あなたの一番であり続けたいだけなのに」
「……俺があいつを苦しめてるって言いたいのか？」
「あなたは悪くない。ただ無邪気で、エッチで、そして親友思いなだけ」

ハートマーク女子の俺に対する評価に顔をしかめる。
これじゃほぼ馬鹿って言ってるのと変わらないぞ。
「馬鹿でもいいじゃない。私もあなたのような人は好き」
いけ好かないイケメン勇者よりはね、とハートマーク女子は付け加えた。
「なぜこんなにも彼はあなたのことを想えるのか、それを知りたくてあなたのことも観察するようになったの。聞こえてくる『声』は控えめに言ってもとんでもなかったよ。でも、不思議と嫌な気持ちになることはなかった。いつしかあなたたち二人を眺めるのが習慣になって、それが縁で友達までできた。我ながらおかしいと思う……でも嬉しかったな」
くすりと笑いがこぼれる。
「幸せになって欲しいの。私を救ってくれたあなたたち二人に。それがこの世で最後の私の願い」
言うに事欠いて幸せと来たもんだ。
今だって俺はこれ以上ないほど幸せだが？
恋人がいなくて童貞なことを除けばな。
「……余計なお世話だと思わないか？」
「そうだね。本当ならあなたたちを遠くから見守ることができればそれで満足だったの

に、いつの間にか欲張りになってしまったみたい」
「だから欲張りついでにお節介を焼こうってのか」
「お節介だと思われても仕方がないね。でも、これだけは知っておいて」
「何を」
俺が問いかけると、ハートマーク女子の真剣な眼差しが槍のようにまっすぐこちらを射抜いた。
彼女の虹彩が七色の光を帯びていることに初めて気付く。
その瞳には一体何が見えているのだろうか。
「あなたの親友は覚悟を決めたよ。この先もずっと、あなたの一番であり続けるために」
ハートマーク女子が柔らかく微笑む。
ごく普通の高校生の女の子のように。あるいはすべてを見通す魔女のように。
「あなたはどうする？」

第8話

あなたはどうする、って言われてもなぁ。
正直いまだに女の子になった親友が目の前に現れた時に自分がどういう反応をするのかが分からないんだよ。
何があろうとも受け入れてやる、って言葉で言うのは簡単だが、現実はそう単純じゃない。
ハートマーク女子もその辺りの俺の中にある迷いを読み取ったからこそ、わざわざあんな話をしたのだろう。
俺の中で答えは出ていない。
結局はなるようにしかならないという気持ちはあるけどな。
だから俺はこれまで通り普通に我が親友に接している。
俺が女子の自宅に連れ込まれて二人きりで話をしたという事実を受け、当初は動揺する気配を見せていた我が親友だが数日経って無事誤解も解けた。

誤解というと語弊があるような気もするが、ともあれ俺とハートマーク女子との間に何もなかったと納得した後は我が親友の態度も普段通りに戻り、喧嘩状態は自然と消滅した。

まあ、喧嘩してもすぐに仲直りするのはいつものことだが。

そうでもなきゃ長年の親友なんてやってられないからな。

で、仲直りした結果俺たちはまた一緒に時間を過ごしている。

今？

我が親友なら俺の隣で寝てるよ。

いや、冗談でも何でもなく俺の部屋の俺のベッドで我が親友は絶賛熟睡中だ。

学校が終わってから俺の部屋でゲームして遊んでいたんだが、しばらくしてあくびを連発し出したかと思うと当たり前のように俺のベッドで眠り始めたんだ。

ちなみに握り込んだ掛布団の裾を胸元に巻き込んで顔を埋め、横向きの体勢で胎児のように丸くなって寝ている。

体勢からも絶対に寝るんだという強い意思を感じるな。

ちょっとうたた寝とかいうレベルじゃなく、完全に全身布団にくるまってガチ寝しているのだ。

さすが十数年来の親友に遠慮の文字はない。

まあ、俺も我が親友のベッドでよく寝るけど。

我が親友が寝た後もしばらく一人でゲームを続けていたのだが、つまらなくなったのでやめた。

スマホを取り出し、これまでに溜め込まれた我が親友の女の子バージョンの写真を一枚ずつ眺めていく。

下着姿でいることもあれば普通の洋服を着ていることもあり、どの写真も我が親友は笑顔を浮かべている。

刺激の強い写真も多いが、さすがに最初の頃のように眺めているだけで即勃起したりはしない。

それよりむしろ我が親友の笑顔を見ていると穏やかな気持ちになれる。

親友がどういうつもりでこんな写真を送りつけてくるのか、最初は見当もつかなかった。

正直今でも理解できているとは言い難い。

単に俺をからかいたいのか、性転換に反対する俺に自分がどういう姿になるのか見せつけて翻意を促そうというのか。

ただこうして魔法の道具で女の子の姿になった親友の表情を一枚一枚見ていくと、頭の悪い俺でも一つだけ分かることがある。

それは、我が親友が本気だということだ。
本気で女の子になりたいのだ。
なぜか？
ハートマーク女子によれば我が親友が俺の一番でい続けたいから、だという。
もっと簡単に言うと、俺のことが好きだからだ。
俺は確かに馬鹿だが、あそこまで言われれば嫌でも察する。
別に気持ち悪いとは思わない。
俺だって我が親友のことは好きだし、好意を向けられて素直にうれしいと思うのは自然なことだ。
たまたま相手が俺だった。
それだけのこと。
だが不幸にも、あえてこう言わせてもらうが、不幸にも俺も我が親友も男だった。
そして、俺が男に欲情することはない。
悪いがそれだけは絶対にない。
我が親友のことは好きだ。
家族を除いて一番に、いや家族と同じくらい俺は我が親友を愛している。
この気持ちは生涯変わることがないだろう。

あいつのためならこの命も惜しくはない。
一緒に死んでくれと言われたら喜んで死んでやる。
でも、セックスはできない。
学校の一部女子が製造回覧している薄い書物のように愛を囁きながら挿したり挿されたりはできないのだ。
これは俺の中の本能に根差したものだからどうしようもない。
親友の女の子より綺麗な顔を見ていると、軽い口づけくらいならできるかもしれないとは思う。
実際、俺のファーストキスは何を隠そう我が親友だ……。
あれはまだ3歳か4歳くらいのことだったのでノーカン扱いでも構わないんだが、まあ事実は事実だ。
なおファーストキスの話になると、赤ちゃんの時に最初にちゅっちゅしたのは自分だと我が母ちゃんと父ちゃんが張り合い始めるので、個人的にはファーストキス論争は不毛だと思っている。
話が逸れたが、要するに軽いベタベタくらいなら抵抗はないが、ガチに結ばれるのはさすがに生理的に無理ということだ。
薄情だって？

非難するならまずケツを掘るか掘られるかしてからにしてくれ。女の子の場合は……どう表現するのか分からんが。

さて、ここまでで終わっていればさほど難しい話じゃなかったんだ。

たとえほろ苦い思い出が加わったとしても、俺と我が親友の関係性は変わることなく生涯続くことになっただろう。

でも、この世には魔法という理不尽なものがある。

俺が男に恋愛感情を抱かないことは先刻承知している我が親友は、その魔法によって一歩踏み越える決断をした。

してしまったのだ。

性転換と軽く言うが、これはほとんど転生に等しい。

同一の個性として記憶の引継ぎは行われるにせよ、転換後の器に合わせてその精神は変質する。

個人差はあるが、別人のように人格が変わる事例も少なくない。

これの意味するところが分かるだろうか。

今俺の隣で安らかな寝息を立てている我が親友は、後わずかな期間でこの世からいなくなってしまうのだ。

存在が消滅してこの世界のどこにもいなくなり、もう二度と会うことも話すことも

きなくなることを死以外の言葉で表現できるなら、どうか教えて欲しい。
そしてその死と引き換えにして、我が親友の記憶を持ち、我が親友の似姿をした少女が俺の前に現れることになるだろう。
だけどそれはもう、俺の知る親友じゃない。
どんな顔をすればいいって言うんだ？
笑えばいいのか？
それとも泣き叫ぶ？
考えすぎだって言われるのは分かっている。
単に性別が変わるだけで同じ人物であることは事実だし、実際これは死でも何でもない。
ネットでは多くの人がこう書き込んでいる。
これはよくできた整形手術に過ぎない、と。使うのがメスか魔法かの違いがあるだけで。
理屈は分かるよ。
でも、俺が話しているのは理屈じゃなく感情の話なんだ。
そして俺の感情がこう言っているんだ。
何よりも大切な我が親友が死んでしまうって。

我が親友は固い意思で、これまでの自分を殺す決断をした。
俺と再び出会うために。
俺のためにそこまでしてくれることへの喜びはある。
もちろん俺だって親友のためだったら何でってやれるし命も惜しくはない。
だけど、この悲しみ。この喪失感。
これらとどう向き合えばいいのか分からない。
我が親友の似姿をした少女を本当に愛せるのかどうか、分からないんだ。
我が親友から送られた写真の最後の一枚を見終わり、俺はスマホを置いた。
ベッドに上がり、我が親友の隣へ仰向けになって身を横たえる。
目を閉じよう。
今はただ我が親友の規則正しい寝息に耳を澄ませ、そのぬくもりを感じながら。

それから少しの間、俺も眠ってしまったらしい。
覚醒すると、まだ隣に我が親友の存在が感じられる。
顔を傾けて隣へ視線を向ける。

すると、すでに目を覚ましていた我が親友が横たわる体勢のままじっとこちらを見ていて、お互いの視線がぶつかり合った。
いつもならここで軽口の一つや二つ出てくるのだが、なぜか今はぴったりと唇を閉ざしたまま動かすこともできなかった。
色素の少ない薄茶色の瞳が湖の底のように揺れている。
我が親友がゆっくりとまばたきをしたら、透明なしずくが音もなく滑り落ちた。
「どうして僕は……」
か細く震えているが紛れもなく少年の声で、我が親友は俺に問いかけた。
「どうして僕は男の子なのかな……？」
俺は何も答えず、ただ手を伸ばして親友の頭に置いた。
くしゃくしゃと少し乱暴に撫でると、親友が目を閉じる。
その拍子に零れ落ちた新たな涙が、俺の枕に小さな染みを作った。

第9話

……よし、デートするか。

いつものように俺と親友は屋上で膝を突き合わせて昼飯を食べていた。

今日もしみじみ美味い我が母ちゃん謹製のミニハンバーグをじっくり咀嚼しながら、忽然と俺は思いついた。

デートしよう。

誰と？

我が親友に決まっている。

俺が決意を固めていると、少し離れた場所から激しく咳込む声と、それを心配する女子たちのざわめきが聞こえてきた。

そちらへ視線を向けると、明らかに水筒のお茶を飲もうとしたのにむせて噴き出した様子のハートマーク女子と、その周りで騒いでいる友人たちの姿が。

何をやっているんだ、あいつは。

俺が呆れて見ていると、水筒を置いたハートマーク女子がこちらにぐるりと体を向け

て、流れるような所作で両手の指先を合わせ、実はそこそこ以上のボリュームを秘めたおっぱいの前でハートマークを象ってみせた。

効果音聞こえてきそうだな。

とりあえず俺も弁当箱を置いて両手でハートマークを作って向こうに見せる。

こちらも返さねば無作法というものだからな……。

あとどうでもいいけど鼻水垂れてるぞ……。

「な、何だか最近彼女と仲がいいんだね……」

状況がよく分かっていない親友が、俺たちの様子を見て困惑気味にそう漏らした。

弁当箱を再び手に持った俺は、我が親友の顔をじっと見つめてから答えた。

「いいか。俺はどっちかというと明るくて元気な子が好みだ」

「ふ、ふぅん。そうなんだ……」

唐突な俺の宣言になぜか顔を赤らめる、明るくて元気な我が親友。

そして少し離れた場所から聞こえてくる咳払いの声。

「……もちろん無口系クールヒロインも悪くないと思う。そちらの方が好きという人も多いはずだ」

「そ、そう……？」

俺の取ってつけた忖度発言に首を傾げる我が親友マジ美少年。

「でも俺が一番好きなのは、誰にでも優しくて、俺が馬鹿やっても笑ってくれて、それで……それで……」

「うん」

いや、何を言っているんだろう、俺は。

ただ単にハートマーク女子と俺との間にやましいことはない（特級の隠し事はあるが）と言いたいだけなのに、なぜ好みのタイプなんか口走っているのだろう。

こういう女の子になってくれって浅ましい注文を付けるつもりなのか？

考えている内に言葉が出てこなくなってしまって、誤魔化すように我が母ちゃん謹製のミニハンバーグをそっと親友の弁当の上に置いた。

俺の顔とミニハンバーグを見比べた親友は、小さく笑ってから自分の豚の生姜焼きを俺の弁当の上に置いた。

「僕、おばちゃんのハンバーグ好き」

「美味いだろ」

何せ我が母ちゃんのハンバーグは天下取れるレベルだからな。

お互いトレードしたおかずを頬張る。

うむ、我が親友のママンお手製の生姜焼きが相変わらずめちゃ美味い。

「なあ」

「何？」
「土曜か日曜、暇か？」
「うん。どっちも予定はないけど」
「じゃあ遊び行こうぜ」
当然我が親友が断るはずもなく、二つ返事で承諾してくれた。
ふっ、まさか人生初めてのデート相手が男になるとはな。
といっても、することはいつも遊びに行くのと変わらないんだが。
しかしまあ、これはこれで悪くないだろう。
……もうあまり時間も残されてないことだしな。

週末の土曜、昼前に我が親友の自宅へ迎えに行くと、妹ちゃんが出てきた。
我が親友はまだ身支度の最中らしい。
いつもより5割増しくらい敵意のこもった視線をこちらへ向けてきたので、ふざけてシャドウボクシングの真似事をしてみせたら、腰が入ったパンチをレバーに食らった。
ちょっと殺意高すぎません？
「ぼ、暴力反対……」

「あたしとお兄ちゃん、どっちが可愛いと思う？」
「は？」
意味不明な質問を投げつけてくる妹ちゃん。
そんなの我が親友のほうが可愛いに決まっているが？
性格的に。
何も言わずとも表情から答えを察したのか、妹ちゃんは苦虫を２４匹くらい噛み潰したような表情を浮かべた。
「……責任取らないとあたしがコロス。社会的にも肉体的にも精神的にもコロスから」
妹ちゃんは言うだけ言ってバタンと玄関を閉めてしまった。
うーん、この殺意の高さよ。
そして、家に上がらせてさえもらえないのは初めての経験なんだが。
まさかの塩対応に呆然とする俺であったが、考えてみれば妹ちゃんにしてみれば大好きな兄がいきなり姉になるとか言い出したわけで、そりゃあ怒りもするだろう。
俺のせいで、と言いたくなる気持ちも無理はない。
結局のところ、俺は親友の性転換を止めることをもうほとんど諦めてしまったからな。
しかし責任と言われてもなぁ。

いくら無二の親友とはいえ、女の子になった途端に恋愛対象として見るのは無理があるというか、どうなんだそれと思わざるを得ない。

恋愛ってもっとこうさ、純粋というか何というか……。

いや、こんな屁理屈をこねたって妹ちゃんには「クソ童貞がっ」ってののしられるだけなんだろうが。

しばらくして出てきた我が親友は妹ちゃんの暴挙を申し訳なさそうに謝ってきた。

「本当にごめん」

「いやいや、いいって」

「帰ったらよく言い聞かせておくよ」

何でも我が親友の性転換についてはもう何か月も家庭内で話し合いを続けていて、パパンとママンは理解を示して応援してくれているらしい。

そりゃあ費用を出すのは親だし、性別が変わるっていうのは本来は大変な決断だからな。家族の理解はあるに越したことはない。

一方で妹ちゃんはといえば明確に反対しているわけではないものの、やはりまだ飲み込めないものがあるようだ。

しかしそれも当然の話だ。他ならぬ俺だっていまだにそうだし、ご両親にしても完全に納得しているわけではないはずである。

そりゃあ責任の一つや二つ取ってもらわないと割に合わないと思いたくもなるだろう。俺の純情なんか我が親友の覚悟に比べれば何の価値があるのか、と。

それはさておき、デートである。

といっても、別段俺たちの行動はいつもと変わることもなく、ゲーセンやボーリングで遊んだりファーストフードで昼飯を食べながら駄弁ったり、そんなことをして時間を過ごした。

正直『これがデートか？』と訊かれたら疑問符は付く。

齢１６にしていまだ童貞たる俺はデートの何たるかを知らぬ。

しかし俺たちは楽しんでいた。

いつものように。

あるいはいつも以上に。

夕方近い時間、俺たちは繁華街の中心にある商業ビルの屋上にいた。

その場所は街が一望できる展望台になっていて、俺たちの他にも少なくないカップルや家族連れで賑わっている。

屋上をぐるぐる巡りながらあそこにあれがある、ここにそれがある、などとはしゃぎまわっていた俺たちだったが、やがてどちらともなく言葉少なになっていき、ついには一言も交わすことなくただ二人で肩を並べて立ち尽くしてしまった。

これまでの人生で我が親友と二人で過ごしていて、沈黙を気まずいと思ったことはない。

しかし、今初めてそれを味わっていた。

……いや、気まずいというのとはちょっと違うな。

ただ互いに伝えるべきことがあるのを分かっているのに、それを言い出せずに延々と間合いを測り合っているような感じだ。

思えば俺と親友の付き合いも長くなったものだ。

出会ったのは保育園の頃だからそれこそ記憶も曖昧なんだが、そこからもう１０年以上の付き合いになる。

母ちゃんたちの話では俺たちは最初っから妙に馬が合ったらしく、保育園ではほとんど引っつき虫みたいになってコロコロ転がり回っていたらしい。

そんな俺たちも高校生になり、自分の将来について漠然とだが考えるような年頃になった。

……そうか。

だから我が親友は、性転換してでも女の子になるしかないと思い詰めたのか。

不意に腑に落ちる感覚があり、俺は大きく深呼吸した。

いつもと変わらないように見えて、少しずつ変わっていく街並み。

かつてそこにあったものがいつの間にかなくなり、別のものに取って代わられ、やがては忘れ去られていく。

もしも俺たちがこのまま男同士の親友として歳を重ねていったとしたら、どうなるだろうか。

俺たちは終生の親友だ。たとえ何があろうともそれが揺らぐことはあり得ない。

……でも、この世に『絶対』なんてものはない。

どうにもならない事情で疎遠になりそれぞれの生活に追われるばかりに、やがてはその存在を思い出すことすらなくなってしまう可能性は常にある。

――そういえば昔すごく仲のいい友達がいたんだよな。

些細なきっかけでそんなことを呟く未来の俺は、果たして我が親友の顔を本当に憶えていられるだろうか。

今の俺からすれば到底信じられない、あり得ない未来図だが、世界も時間も俺たちの事情を斟酌してくれるわけではないのだ。

世界は断固たる強制力を持って俺たちを引き離し、時間は冷徹な手付きで俺の記憶から我が親友の姿を削り剥がしていくだろう。

あるいは終生の親友関係を継続できたとしても、やはり何も変わらないというわけにはいかない。

もし俺にこの先恋人でもできて、大人になって結婚するようなことがあれば、当たり前の話だが俺にとって一番大事なのはその人たちとなる。
我が親友のことが大事な存在であり続けるのは間違いない。
だが、一番ではなくなる。
恋人や妻子と親友とどちらかを選べと言われたら、俺は前者を選ぶだろう。
その事実が親友の心を粉々に打ち砕くなどとは思いも寄らず。
日々俺は妻を抱き、子どもと遊び、当たり前の顔をしてその外側へ我が親友を追いやっただろう。
もし俺が、何も知らなければ。

「なあ」
「うん」
日が傾き始めていた。
いつまでもだんまりを決め込んでここでこうしているわけにも行かない。
「俺のこと、好きなのか？」
意識したわけではないが、感情を抑制しようとするあまり少し平坦な口調になってし

まった。
我が親友が体を強張らせる気配が伝わってくる。
責められていると勘違いしたのだろうか。
夕日に照らされた我が親友の顔は、気の毒なくらいに真っ白だった。
「……ごめん」
ただ一言、我が親友は謝った。
震える声で。
痛みをこらえるように。悲しみに耐えるように。
「別に謝ることじゃないだろ」
「でも気持ち悪いって思ったでしょ」
「んなことないって」
好きになった相手がたまたま同性だった。
ただそれだけの話だ。
女好き女好きとさんざん言っておいてアレだが、俺は同性愛だのなんだのには理解があるほうというか、さほど嫌悪感は抱かないタチだ。
ただし嫌悪感を抱かないからといって、俺自身が同性愛者になれるかと言われるとそれは話が別だと答えるほかない。

申し訳ない気持ちはあるが、こればかりは友情や同情心でどうにかなる問題ではないのだ。
「性転換したいっていうのもそれが理由か？」
「……女の子になりさえすれば、自分の気持ちを隠さなくてもよくなると思ったんだ。それに女の子になれば……僕のことも好きになってもらえるかもしれないって」
唇を震わせながらそう告白した親友は、ゆっくりと目蓋を閉じた。
透明な涙がなめらかな頬を滑り落ちる。
肩を抱いて引き寄せると、我が親友は素直に体を預けてきた。身長差があるので俺の腕の下にすっぽり収まるような格好になる。
「そうか……」
「ごめんね」
「謝るなって」
両手で俺の服にしがみつくようにして、親友はぼろぼろと泣きじゃくった。
時々親友の頭を撫でたりしながら、気の済むまで泣かせてやる。
まあ、仕方ねぇよな。
好きになっちまったんだから。
俺自身は最近まで気付いてもいなかったけど、ずっとつらかったのかもしれないな。

しばらく時間が経って、大分空が薄暗くなってきた。
俺たちは相変わらず肩を抱いて、というかほとんど正面から抱き合うような恰好になっている。
時折外野からの下世話な視線を感じたりひそひそ声が聞こえてきたりするが、気にするのも馬鹿らしい。
どうせ学校にいる時だって似たようなものだからな。
「俺さぁ」
「……ん」
呼びかけると、俺の胸に顔を埋めた親友がくぐもった声で応じた。
「お前に逢えて本当によかったって思ってるよ」
俺の腰に回された両腕がぎゅっと締まる。
頬というかあごの縁で胸元にある頭を軽くぐりぐりやると、親友が顔の向きを変えた。
「お前は最高の親友だよ。だから……」
「……だから？」
湿り気を帯びた甘え声で親友が俺の言葉を繰り返す。
「だから、俺はお前のことを忘れない。女の子になったお前を好きになるかどうかは約

束できないけど、たとえどういう結果になったとしても、絶対に忘れないよ」
この世に『絶対』なんてものはない。
それは分かっている。
だけど、俺はこの約束を限りなく絶対のものにするためにすべてを懸ける。
我が親友がそうしようとしているように。
「ありがとう」
我が親友が俺の胸に顔を擦りつけ、少し鼻を啜った。
泣き虫な奴だなぁ。
「ねえ」
「ん」
「好きだよ」
我が親友の告白がどうしようもなく嬉しくて、悲しくて、寂しくて、無言のまま俺はただ親友の体を強く抱きしめた。
涙が零れ落ちないように、かすかに星が瞬き始めた夜空を見上げながら。

それから一週間後、我が親友はこの世界からいなくなった。

第10話

性転換魔法の施術はれっきとした医療行為である。

とはいえ、当日病院へ行って優しい魔女に魔法をかけてもらって、はい終わり、となるわけではない。

入院から退院できるまで少なく見積もっても１０日間ほどかかるし、そもそも自分の好きなタイミングで施術の予約が取れるわけでもない。

というわけで我が親友がアンセゴーゼルニ魔法クリニックという舌を噛みそうな名前の病院へ入院したのはまだ学期末まで残り一か月という中途半端な時期であった。

性転換のために入院する、と大々的に公言していたわけではないが、何となく事情は知れ渡るものだ。

我が親友が女の子になるという事実は、おおむね好意的に受け止められていた。

実際のところ、驚いたというより納得したという印象を抱いた者のほうが多いようだ。

これは他人の心を読み放題のハートマーク女子からのタレコミだが、俺自身肌で感じ

ていた。
我が親友が入院して以来、女子たちの多くは俺に対して優しくなった。
いや何でやねん、と思うかもしれないが、ガチである。
女子たちは親友不在でも寂しくないか俺を気遣い、女の子となった親友との接し方のアドバイスをし、我が親友のこれからを俺に託した。
どうしてお前らによろしくお願いされなくちゃいけないんだよ、という突っ込みが追いつかないほどどいつもこいつも口を揃えて同じようなことを伝えてくるのだ。
そして最後には決まって俺たち二人を祝福してくれる。
祝福……？
男子どもの反応は女子と比べれば圧倒的にからかいや嫉妬が多いが、それでも俺たち二人の仲を認めない者はいなかった。
二人の仲……？
いずれにせよ女子にも男子にも共通して言えるのは、我が親友が俺のために性転換すると認識している点だ。
何というか……うん、我が親友の気持ちとか割と皆に筒抜けだったのかな？
確かに俺たちは昔から特別仲のいい親友同士だったとは思うが。
でもまさか親友としての好意だとばかり考えていたものが恋愛的な好意だったとは

思わないだろう。
少なくとも俺はまったく気づいてなかったわけで。
こうも当たり前のように我が親友の性転換を受け入れられてしまうと、これまで必死になって認めまいと頑張っていた自分がひどく心の狭い人間だったんじゃないかと不安になってくる。
「心が狭いんじゃない。ただどうしようもなく鈍感で意固地だっただけ」
他人のモノローグに勝手に割り込んできて何か言ってくる奴もいるが、ともあれ我が親友のいない間、俺はそんな風に困惑して過ごしていた。

この日も昼休憩が始まるなり、バレーボール女子が心配そうに俺の顔を覗き込みながら話しかけてきた。
「大丈夫？　今日のお昼、私たちと一緒に食べる？」
……それほど意気消沈して見えるのだろうか。それとも我が親友がいないと一人では何もできない奴だと思われているのか？
扱いがまるきり運動会で保護者不在の子どもみたいだぞ。
そしてあまり無防備に身を寄せてこないでほしいのだが。

めちゃくちゃいい匂いがするし、何よりおっぱいの迫力が凄すぎる。
有り余る巨乳でパーソナルスペース突き破るのは一種の暴力だと思うんですよ……。
まあ、あのおっぱいの感触を俺（の背中）は知ってるんですがね、へへへ……。
などとくだらない思考を巡らせながら人差し指で鼻の下を擦っていると、バレーボール女子の背後から絶対零度の視線を向けてきていたハートマーク女子が親指で首を掻き切るジェスチャーをしてみせた。
いかん、殺される。
「あー、俺、あいつらと食べるから」
怪しげな挙動でバレーボール女子の身体から距離を取ると、俺は背後で机の並べ替え作業をしている男子グループを親指で指差して言った。
男子どもを見たバレーボール女子は一瞬だけ『え、自分たちじゃなくてアレを選ぶの？』という眼差しを浮かべたが、すぐに人懐っこい笑顔を浮かべた。
「そう。でも何かあったら言ってね。いつでも話を聞くから」
俺に優しい言葉をかけてから、弁当箱を片手に友人たちと教室を出て行くバレーボール女子。
やっぱり可愛いな。
彼女が出て行った後のドアをぼんやり眺めながらアホみたいに放心していると、視界

の端からにゅっと割り込んできた無表情系クール女子が俺にだけ聞こえる声量で忠告した。
「浮気したら口では言えないような魔法をかける」
「やめて」
先ほどの短いやり取りで俺がバレーボール女子に抱いた『可愛い』とか『いい匂いがする』とか『おっぱい』とか、そういう思考がすべて筒抜けになっているので、無駄な言い訳はしない。
「心配しないで」
ハートマーク女子がほんのかすかにくちびるの端を痙攣させた。
たぶん笑ったつもりなんだろう。
安心できない微笑だ。
心配しないでと言われても、お前に何をされてしまうのか心配しかないんだが？
俺の心の中の突っ込みを余すことなく読み取っているはずだが、ハートマーク女子は微笑み未満の表情を変えることなく言葉を続けた。
「あなたは必ず恋に落ちる。だから心配しないで」
恋ねぇ……。
いやまあ、そりゃ我が親友は可愛いよ。

魔法の道具を使った女体化予想図みたいなものを見せてもらうまでもなく、そんなことは分かり切っている。
女の子になればそれこそ世界一可愛いだろう。
古事記にもそう書いてある。
太字でな。
しかし、だからといってこの俺がホイホイ恋に落ちるかというと、そうはならないだろう。
だって我が親友だぜ？
いくら可愛くても、いくらおっぱいが大きくても、いくら短いスカート穿いて目の前でパンチラとかしてくれてもだよ。
元は男だって知ってるわけだし、そう簡単に気持ちを切り替えることはできないだろう。
人の心ってのはそんな簡単なもんじゃない。
ないはずだ。
「自信満々に言ってるけど、未来でも読めるのか？」
心だけじゃなく未来まで読めるなら無敵だな。ま、気が狂わなきゃの話だが。
「未来は読めない。でも二人のことは知ってる」

「なるほど？」
そりゃ俺たちの気持ち読み放題だもんな。
でもまあ、それでもやっぱりそんな簡単なもんじゃないよ。
ハートマーク女子はいつもバレーボール女子たち仲良しグループで昼食を摂っている。
すでに教室を出て行った友人たちを追うため、彼女も教室を出て行こうとしたが、不意に振り返ってこちらをじっと見た。
「パンツを見せたら私のこと好きになる？」
……。
「分かった。見せないよう気を付ける」
心は簡単じゃないが、下心って奴はなぁ……。
わざとらしく後ろに手を回してスカートを押さえながら教室を出て行ったハートマーク女子の揺れる尻を見送ってから、俺は後頭部をわしわしとかき回してため息を吐き出した。
「弁当食うか」
恋って何なんだろうな。

我が親友が姿を消してからきっかり二週間後。
日曜日で特に用事もなく、ソシャゲのガチャを回したりマンガを読んだり腹筋をしたりして過ごしていたら、ピンポーン、とインターホンが軽快な音で来客を知らせてきた。
はーい、と母ちゃんが返事をし、ついでドタドタという軽快とは言い難い足音が響く。
我が母ちゃんはちょっとガサツだからなぁ。
だがそこがいい、と昨夜も父ちゃんがドヤ顔で言った後、母ちゃんのケツをしばいて逆に頭をしばき返されていたが。
もっとガキの頃はケラケラ笑っていたが、うちの父ちゃんと母ちゃんはちょっと愛情表現がおかしいんじゃないかと最近疑っている。
インターホン越しで何を話しているのか聞き取れないが、母ちゃんのやたらハイになった声が聞こえたかと思うと、ドタラタタタ!という感じの足音?が近づいてきて、俺の部屋のドアに衝突した。
「何やって……」
鏡の前で腹に力を入れて腹筋の割れ具合を確かめていた俺が呆れて振り返ると、ドアを粉砕せんばかりの勢いで開け放った母ちゃんが大興奮の面持ちで伝えてきた。
「お友達!　来てるわよ!」

お、おう。

マッスルポーズを決めたまま、俺は困惑気味に母ちゃんの様子を見つめた。

「カッコつけてないで早く出て！　あ、服は着なさい！　服は着ないと駄目よ！」

そりゃ人前に出るなら服は着ますけども。

ベッドの上に放り出していたTシャツを着て玄関に向かおうとすると、なぜか母ちゃんからの物言いが入る。

「ちょっと違うの着たら？　ほら、何かお気に入りのがあったでしょ！」

自分の着ているTシャツを見下ろし、俺は眉をひそめた。

毛筆風の筆記で力強く『オシャンティー』と印字された白Tシャツなんだが、これじゃ駄目ですかね。

ぶっちゃけ部屋着だし外に着て出ることはないが、一応これもお気に入りなんだが。

我が親友も同じTシャツを持っているし。

「いいよこれで」

「駄目駄目、こっちにしなさい！」

俺のタンスを漁って目ぼしいTシャツを選び出し、胸元に押し付けてくる母ちゃん。

何をそんなに必死になっているのか分からないが、面倒くさくなった俺は言われるとおりに着替えることにした。

それなりのブランドのちょっと格好いいTシャツだ。ちなみに我が親友が選んでくれた。

「なあ、母ちゃん。俺の腹筋どう？」

「馬鹿言ってないでとっとと行きなさい！」

引き留めて着替えさせたのは母ちゃんなのにこの理不尽な扱いよ。

何だかな—という気持ちを込めて尻を掻きながら、俺はペタペタと玄関へ向かった。

いやまあね？

俺だって分かってるよ。

母ちゃんがこれだけ興奮する俺の友達ってのが誰なのかってことは。

ただ、事前に連絡はなかった。

退院したって知らせも受けてないし、そもそも入院中は面会謝絶だったから性転換が成功したのかどうかも分からない。

あいつなら来る前に連絡してくれそうなものだけど、サプライズとかも意外と好きな奴だからな。

多分そうだろうな、でも違うかもな。

そんな風に期待しすぎないよう気持ちを抑制しながら、ドアノブに手をかけ、ゆっくりと玄関のドアを開けた。

そこには、女の子が立っていた。
真っ白なワンピースがとてもよく似合っている。華奢な素足は踵の高いサンダルで包まれていて、よくそんな器用につま先立ちができるなと場違いな感心をしてしまう。
小さくてかわいいバッグのストラップを両手で持つ様がいかにも女の子らしく、左腕の手首に巻かれた無骨なデザインの時計との対比につい笑みがこぼれる。昔俺が選んで一緒に買ったGショッ○だ。
おっぱいはやはり大きい。が、今はそれはおいておこう。
記憶にあるよりずっと長い黒髪は宝石のように輝いていて、耳を飾り付ける大ぶりなイヤリングが身じろぎの度に揺れて澄んだ音が聞こえてくるようだ。
そして顔立ちには紛れもなく慣れ親しんだ面影があった。
世界で一番大事だった、我が親友の似姿が。
頬を紅潮させてどこか恥ずかしげに、でも満開の花のような笑顔を浮かべた世界一可愛い女の子は、桜貝のようなくちびるをゆっくりと開いた。
「きみに逢いに来ました」
知らない声だ。
でもなぜか柔らかい雨のように胸に沁み込んでくる。
「きみだけに、逢いに来ました。ボク、私は……」

かつて我が親友だった女の子は、それ以上言葉を続けることができなかった。
裸足のまま玄関から飛び出した俺にきつく抱きしめられたからだ。
俺の行動は完全に衝動的なもので、何か考えがあってのものではなかった。
ただ、理解したのだ。
我が親友の存在が完全に消えてなくなってしまったわけじゃない、と。
言葉は出てこなかった。
雲一つない晴天から音もなく落ちてきてこの身を貫いた甘やかな雷が、舌を麻痺させてしまったせいかもしれない。
相変わらず小さく、しかし格段に柔らかくなった我が親友の体を、俺はいつまでもいつまでも抱き締め続けていた。

オールユーニードイズ……

まだ足取りの覚束ない幼児が、きゃらきゃらと笑いながら歩いている。
その後ろを長身でつらいだろうに中腰を保ったままの姿勢で父親が付いて回っている。いつでも子を受け止められるよう、両手を差し伸べながら。
「ままっ！」
少し先にいる小柄な女性に視線を置き、幼児が弾けるように声を上げた。
「ママ、あそこにいるねぇ」
父親の低い応えには、どこまでも優しさがこもっている。
「まま、いたーっ！」
幼児が走る。短い脚を精一杯に動かし、笑い声を振りまきながら。
鈴の入った毬が弾むのにも似た疾走は、ストッキングに包まれた母親の脚に衝突することで停止した。
成熟した女性の肉感を備えた柔らかな脚に全身でしがみつき、幼児は満面の笑みで真上を見あげた。

「ままっ！ままっ！」
幼児の言葉はもはや笑い声とほとんど判別がつかない。
我が子にしがみつかれた母親は、ことさらにびっくりしたような表情で足元を見下ろし、愛おしさで溢れる笑顔を咲かせた。

「よう、お待たせ」
しゃがみ込んだ母親が幼児を抱き上げる様子を見守っていると、横合いから親しげな調子で声をかけられた。
「うん」
一呼吸置いてまばたきをし、それから声の主へ振り返る。
ボクの親友、ボクの大好きな人がそこにいた。
「早いな、つかさ。俺ももう少し早く出りゃよかった」
「ボクもさっき来たばっかりだよ」
そう答えると、ボクの大好きなくしゃくしゃの笑顔を浮かべて、おどけるように彼は言った。
「小説と同じセリフを本当に言う奴っているんだな」

「本当に言う人がいるから小説にも出てくるんじゃない」
「なるほど、事実は小説より奇なりって奴」
「それは違うと思うなぁ」
彼のお馬鹿さんな返しに笑顔を浮かべる。
こんな風な何でもないやり取りが、胸が張り裂けそうなくらい愛おしい。
これはボクがおかしいんだろうか。
それとも他の皆も同じように感じているんだろうか。
抱き上げた幼児を真ん中に挟んで笑い合っている親子の元へ向かって行って、質問をぶつけてみたい衝動に駆られる。
ママと呼ぶ我が子を見ただけで泣きそうなくらい優しい笑顔を浮かべるあの人たちなら、答えを知っていそうな気がした。
「つかさ、行こうぜ。何見てんだ?」
取り留めのない思考を振り切り、ボクは軽くかぶりを振った。
「ううん、何でもないよ、まーくん」
てらいのない笑みを浮かべてボクを促すまーくんを見て、小さく頷く。
先ほど自分に問いかけた疑問の答えはすでに分かっている。
「まーくん、手ぇ繋ご」

彼のすぐ傍らに並びながら、了解を得るより先にするりと大きな手を摑まえてしまう。
ボクの手を振り払うことができないまーくんは、かといって自然体で受け入れることもできず、何だか「ああ」とか「うう」とか唸っていた。
「まーくんの手、大きいね」
「……つかさのが小せぇんだよ」
わざと少し荒っぽい口調を使うのがおかしくてくすりと笑いを零すと、照れ隠しのためかまーくんがボクの手を握る力を強めた。
少し痛くて、すごく嬉しい。
「あったかいね、手」
「別に誰だってそうだろ」
こっちを見ずにぶっきらぼうに答えるまーくん。
まだ女の子のボクとの距離を測りかねているのか、単純に恥ずかしいのか。
少しだけ耳が赤くなったまーくんの横顔から視線を外して俯いたボクは、大事な大事な秘密を明かすように、そっと呟いた。
「誰でもじゃないよ」